

Fate/Ultimate Fleet
運命の舵輪は廻る

大極光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

枢軸国が最後まで優勢だった世界。

1943年 イギリスがドイツに降伏直前になったこの年、連合国は欧州での最初最後の反攻作戦「大君主作戦」を決行。

しかし、空前絶後の巨大艦艇「超兵器」を持つ枢軸国はこれを海上で迎撃、勝利を収めた。

これにより連合国、特にイギリスは戦力の過半数を失い、大勢は決した。

しかしドイツも無傷だった訳ではなく、大君主作戦の最初の攻撃、ドイツ全土への爆撃計画でペーネムンデにある第三帝国特務研究機関「グレンシュティム」が爆破され、

そこにいたある男が生涯を終える。

これはドイツ光学兵器の権威と呼ばれた1人の男が別世界で再びその力を振る話である。

※1 プリヤの世界でオリ主がほぼ無双する話です、お嫌いな方はブラウザバック推奨です。

※2 恐らく士郎君は登場しません。

※3 現在参戦している兵器（または参戦予定）の元ネタ（7月20日更新）
機動戦士ガンダムUC

ダンボール戦機

鋼鉄の咆哮シリーズ

蒼き鋼のアルペジオ

史実兵器

目次

プロローグ 再軍備！ ネオ・乙計画

第0話 転生！ 光学兵器の権威（マ

ニア） 1

第1話 幼児からのリスタート

9

第2話 妹と引越し 21

第3話 新たなる戦友 33

第4話 資材源 49

第5話 目覚める能力 63

第6話 産業革命 77

原作開始！ 鯖対超兵器

第7話 来たるXデー 90

第8話 初陣 106

第8話 転校生 120

第10話 敗北と特訓、そしてさらな

る武装開発 134

第11話 出撃 149

第12話 人類最強対人類最強

162

第13話 万甲を貫通する機光の槍

178

プロローグ 再軍備！ ネオ・Z計画

第0話 転生！ 光学兵器の権威（マニア）

現在地???

???"う…ん…何処だここは？"

やあ、諸君。はじめまして、

僕はレーベレヒト・サンダルク、ドイツ第三帝国海軍技術研究機関の大佐だ、レーベ
とでも呼んでくれ。

さて、僕は今非常に不思議な光景を目の当たりにしている。

見たことの無い地形だった、眼下に広がる渓谷、その渓谷の底には水があり、軍艦が
多数並んでいる、そして蒼い長方形の板が空へ向かって階段のように螺旋状に続き、僕
はその階段の一部に立っていた。（ぶつちやけて言うとか蒼き鋼のアルペジオCaden
zaの終盤のシーンです、「Lust Refrain」が流れたあたりです。by作
者）

レーベ「あいつが好きそうなところだな」

あいつと僕の友人だ、身も蓋もなく言ってしまうえば軍艦と妹が大好きなシスコンオタ

くだ。

まあ、軍艦が好きなのは僕もだが…

それはさておき…

レーベ「まさかここがヴァルハラか？ 景色は良いがそれだけだな…」

僕は死んだはずだ、研究所を連合軍の爆撃で破壊され、僕はその時研究所にいたため、生きているはずがないのだ。

だがここがヴァルハラというのも納得がいかない。

もつと派手なところかと思っていたのだがな…

まあ、それは良いとして誰もいないというのが不思議だ。

そこに…

???「ここはヴァルハラではありませんよ、大佐殿」

レーベ「誰だ!？」

僕が振り向くと件の友人…によく似た人物が立っていた。

グレーに近い銀髪、同じ色の瞳を持った男だった。

それよりこいつ… 今なんと言った？ ここがヴァルハラでは無い？

ふむ、ひとまず話を聞いてみるか。

???「非礼はお詫び申し上げます、大佐殿。 何分時間がある訳では無いのです」

ふむ、急がなければならぬ理由があるのか…

レーベ「なら手つ取り早く済ませよう、

僕はレーベレヒト・サンダルク、ドイツ第三帝国海軍技術研究機関の人間だ、ここは何処だ、そして君は誰だ？」

???「ここは私が作り上げた空間です、大佐殿は意識のみでここに来ていただいています。そして私は…今は名乗れません、ですが呼び名がないのも不便でしょうから私の階級、少佐とお呼びください」

意識のみだと？　じゃあ僕の身体はどうなったんだ？　まさかこれから死んでいくなんてことになるのか？

冗談じゃない、そう言うと思ったが…

少佐「大佐殿の身体は連合軍の爆撃によつて既に死亡しています、大佐殿の意識のみを私の力でここに繋ぎとめていますがね」

マジで？　じゃあ何か、こいつのおかげで僕まだ生きているわけ？（いや生きていると言える状況なのかはさておく）。

レーベ「なら少佐、君の意図がわからない。死にかけの僕をここに繋ぎとめておいて君は何がしたいのだ？」

そう、これが一番の謎だ、この男の目的が分からない、この一介の研究員を助けて何

がしたいのか。

少佐「大佐殿の懸念はもつともです。私は大佐殿にあるお願いをしに参りました」

レーベ「お願い？」

少佐「はい、大佐殿には別世界で新たな人生を歩んでいただく、俗に言う転生というものをして頂きたい」

は？ 転生？ さつきから何が何だかよくわからんな…

少佐「大佐殿の卓越した技術力とその頭脳を持つて、別世界に行つて頂き、その世界の住人となつて頂きたいのです」

どういう事だ…

少佐「ご説明致します、そもそもその世界というのは特殊でしてね、特定の人物がいないと安定しないのです、それが異常気象や地殻変動といった形で現れるのです、そして大佐殿に行つてもらふ理由はといいますと…」

レーベ「その重要なピースが足りないから僕が代わりに、というわけだな？」

そこまで言われたらわかるさ、伊達に技術士官で大佐まで行つてないからな！

少佐「流石大佐殿、話が早くて助かります、その通りです。欠損したピースに一番適応するのが大佐殿、あなたなのです。ですで行つて頂けませんか？ 無論、大佐殿は一度人生を歩まれた方です、強制は致しません、お疲れになられたのでしたら断つ

て頂いて結構ですが…」

少佐よ、そうは言うが僕は14で死んだんだぞ、疲れている訳がなからう！

レーベ「いや、行かせてもらおう、ヴァルハラより面白そうだからな」

少佐「ありがとうございます大佐殿」

レーベ「少佐、僕が行く世界について説明はしてもらえるのか？」

流石に断片的なものでもしてもらわないと初動がおくれてオワタなんてことにはなりたくない。

そもそもただ僕が存在するだけで安定するなんてうまい話があるわけがない。

絶対何かある、それと僕が置かれる環境、これらが分からないと準備出来ない、さて

少佐は喋ってくれるのか？

少佐「はい、大佐殿に行ってもらう世界には魔法や英霊といった非科学と総称されるものが存在します、大佐殿にはこれらと戦ってもらう可能性があります」

…：もう何も驚かないぞ…、それより魔法か… 僕の分野で勝てるのかそれ…

少佐「当然勝てます、その魔法文明を密かに行うくらいまで衰退させたのが大佐殿の分野も含まれる科学的なのですから」

さつきから思っていたがこいつ僕の心読んでない？ 応答が的確すぎるんですけど

… まあ良い勝てるのならあとは環境だけだな。

少佐「環境は日本の一般家庭ですね」

……オワタ、無理だろ!? 一般家庭!? いや確かに望んでいたものだけどき、ろくな準備出来ないじゃんそれ! 何か、火とか撃ってくる相手に鉄パイプとかで戦えって? 冗談きついつすよ旦那。せめてそのパイプにストックとかマガジンとかトリガーとか付けてもらわないと…

少佐「環境は戦い向きではありませんが大佐殿の能力を強化させていただきます」
強化? 何?

少佐「完全記憶能力と100項目以上を同時処理可能なマルチタスク、それとこの地上に存在するありとあらゆる兵器とカテゴライズされるものの知識を差し上げます」

ああそうか、何も武力で勝たなくても良いんだった。

もとより僕は頭脳派だ、頭で勝ってやろう… ってなるか!?

無理だろ!? チェスじゃないんだからさ!

もういいよそれで… ないよりマシだし…

少佐「では転生の準備をさせていただきます」

そう言うのと少佐が何やら不思議な呪文を唱えだすと、螺旋階段の中央に巨大な穴が
来た。

少佐「ちなみに今お渡しした能力はあくまで氷山の一角です、大佐殿がこの世界に適

応じて来たならばまた次の段階の力をお渡しします」

え？ マジで、これで一角なの？　じゃあ期待できるな、頑張るか！

そう言えば…

レーベ「なあ少佐、僕の名前や見た目はどうなるんだ？」

転生つてそのまま出来るものだったっけ、そう思ったため少佐に聞いてみた。

少佐「見た目は髪や瞳の色が変わるくらいでしようか、お名前は苗字が変わりますね」
なるほど、苗字が変わるのか、結構気に入っていたんだけどな、このサンダルクつて
苗字、意味知らないけど…

レーベ「そうか、分かった。　じゃあもう行くよ」

少佐「ええ、また会える日を楽しみにしております、ご武運を」

少佐がナチス式の敬礼をして来たので僕も敬礼を返してその穴に飛び込む。

レーベ「なんかよく分からんことになったがまあいい、魔法だろうが英霊だろうが関係ない、敵対するのなら…」

「全て焼き払うだけだ」

この日、ドイツ第三帝国光学兵器の権威レーベレヒト・サンダルクは元の世界から消滅した。

第1話 幼児からのリスタート

現在地???

レーベ side

う…ん…? ここは…どこだ? ってなんか前もこんな始まり方だったな。

さてどうするべきか、まあまずは状況の確認だな。

えーと今はっと…

レーベは周りを見渡す。

すると…

???'「あら? 見て切嗣、レーベが起きたわよ」

切嗣「ほんとだ、おこしちゃったかな?」

アイエエエ巨人!? 巨人ナンデ!? いや違う、僕が縮んだのか? マジか、僕は某名

探偵かよ… ちくせう、こんな身体じゃ何も出来ないじゃんか…

少佐『では動けるまで知識を貯めてはいかがでしょう?』

少佐! これどういうことだよ!

少佐『申し遅れましたが大佐殿はもう一度幼児から再スタートとなります、ですので

最初は何も出来ません…』

あーはいはい、分かりましたよ。

じゃあそうしますよ！（ヤケクソ）

1年と数ヶ月後…

やあ諸君、僕だ、レーベレヒト・サンド… 失礼、まだ慣れていなくてね。

改めましてレーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。

ようやく歩けるようになった、いやしかしこの精神年齢で赤ちゃんと同じことされるのはいささかきつかったな、アハハハハ（死んだ目）

まあそれは置いといて皆に報告だ、調べた結果、なんと僕は城に住んでいたのだ。

いや名前から貴族なのは察していたがまさか城に住んでいたとはな…。

次に家にガラクタの山があり、外には森が広がっていた、聞けば私有林らしく、何本か切って良いか聞いたところ、OKが貰えたた兵器の材料には困らなくなった。

以上…

アイリ「はい、じゃあ頭洗いしましょうねレーベ♪」

レーベ「自分で出来るよ…」

お風呂場からの報告でした。

そしてこの楽しそうに話しているのはアイリス・フィール・フォン・アインツベルン、僕の母さんらしい、白い髪と赤い瞳が特徴の美人さんだ。

僕はこの人とさっきいた切嗣って人の子供で日独のハーフらしい。

ちなみに僕は母さんの遺伝子を強く受け継いだらしく、茶髪だった僕の髪は白くなつており、瞳も赤色だ。

余談だが父さんが「僕の遺伝子はどこいったんだ…」って嘆いていた、ドンマイ父さん。

で、話を戻す？ が僕は母さんに出来れば頭を洗って貰いたくない。

なぜなら…

アイリ「ダメよ、ほら行くわよ♪」

レーベ「目がアアア、目がアアア！」

容赦ないんだもん…

数十分後：

アインツベルン城 レーベの自室

ああ、酷い目にあつた…。

少佐『心中お察しします…』

絶対耐水バリア作ってやる！

まあ、資材の関係上、最優先はそっちではないがな…

少佐『そんな事より大佐殿、資材はありますが数が全く作れない状況です、まず何を作りますか？』

ふふふ、よくぞ聞いてくれた！

実はなこの前ガラクタを漁っていた時にこんなものを見つけたのだ！

そう言つてレーベは部屋の棚から黒い物体を2つ取り出し、机に置く。

少佐『これは… 左利き仕様のルガーP08にワルサーP38ですか？』

その通り、だが弾丸すら入っていない骨董品だ、これらを使いまずは携帯火器であるレーザーガンを作ろうと思つてね。

少佐『レーザーガンですか、確かに大佐殿の分野ですな』

だろう？　じゃあ少佐、悪いが誰か来たら教えてくれるかい？

少佐『了解しました』

三人称 side

アインツベルン城　とある一室

切嗣「レーベはどうしてるんだ？」

ベランダで煙草を吸いながらそう言う切嗣。

アイリ「自分の部屋でガラクタをこねくり回してるわ、本当にやつと1歳になったばかりの子供か疑わしいわ」

切嗣「全くだ、すぐに言葉だつて覚えたり、文字や数字だつて読める。　本当にまだ

3歳にも満たない子供には見えないな……」

切嗣は短くなった煙草を灰皿に捨て、部屋の中に戻る。

切嗣「ちゃんと封印はしたんだろう？」

アイリ「それは確實よ、ただあれはどちらかという科学技術のようなものだと思うのよ」

切嗣「そうか、やれやれまだ謎が多いな」

そんな感じで夜は更けていく……

数ヶ月後……

レーベ side

アインツベルン城 レーベの自室

ついに完成だ！

机の上には新品同様に磨かれ、かつ銃は骨董品なのにどこか近未来チックなオーラを

纏う2丁の拳銃が置かれてあった。

少佐『おめでとうございます大佐殿』

良し！早速試射だ！ 少佐、どこかぴったりな所ない？

少佐『そうですね、この城から少し北に行ったあたりに空き地があります、そこでしたら十分なスペースがあるでしょう』

了解！ じゃあ早速行ってみますか！

そう言いつつレーベは誕生日プレゼントで貰った白衣のポケットに完成したレーザーガンを入れ、作っていた木製の的をリュックサックに詰めて、こっそり城を抜け出した。

はい皆、噂のお母さんの登場よ！

さて挨拶はこのくらいにして、早速レーベを追いかけてみましょうか！

レーベと少佐は気がついていなかったが城を抜け出した際に見つかっており、あとをつけられていたのだ。

うーん、どうやら北の空き地に向かうみたいね、何する気なのかしら？

数分後：

付いたわね。

あの年で木登りなんて… 何か木の板を木にぶら下げたわね？

そして… ツ！ 拳銃!? なんてあの子があんなの持つてるの!?

これはO☆H A☆N A☆S H Iが必要みたいね、なんであんな物騒なものを、でももう少し見守るといいうのも…

ビューーン!!

レーベ「よし!成功だ! いやゝ頑張った甲斐があつた!」

……前言撤回、あれ普通の拳銃よりヤバい代物だわ、あの子部屋にこもつてあんなもの作つてたのね…

母親としてちゃんと云つて聞かせないとね!

アイリ「レーベ? 何してるのかな?」

レーベ side

さてついた!

少佐『では的を設置しましょうか』

だね、というわけで早速木登りだ!

こういう時に身体が小さいと便利だよね!

さて的の設置も終わったし、早速撃つか！

さてどっちから撃とうか：

少佐『やはり大佐殿の利き手である右でいかがでしょうか？』

そうだね、じゃあワルサーP38の方から：

少佐『もう少し上を狙って下さい。 …はい、そこでOKです』

行くぞ！ 第1射、撃ち方始め！

ビューーン!!

レーベ「よし！成功だ！ いやゝ頑張った甲斐があった！」

少佐『的の中央に命中、お見事です大佐殿』

僕の射撃の腕は普通だよ、今はいい方だし、少佐の補正もあったしね。

少佐『そうなのですか？ まあ左手でも試してみれば分かりますよ』

そうだね、父さんや母さんにバレる前にさっさと終わらせて帰ろう。

えーとルガーP08はと：

アイリ「レーベ？ 何してるのかな？」

少・レ「は？」

数分後…

アインツベルン城

まづいまづいまづい！

少佐、これどうするんだよ!?

少佐『流石にこればかりは私にもどうしようもありませんよ!』

アイリ「レーベ？」

レーベ「は、はい」

アイリ「どうしてこんなもの作ったの？」

レーベ「いや、えーとその、興味本位で…」

いや本当は少佐に「いつかあなたに敵が現れるでしょう」なんて言われたから準備してただけど信じてもらえなさそうだし…

アイリ「…分かったわ、話したくないならそれでいい。これは没収しないけどこれ

だけは約束して」

レーベ「な、何？」

ギユッ

えっ!?! 何か抱きしめられたんですが!?!

アイリ「危ない事には関わらないようにね、OK？」

レーベ「分かったよ」

アイリ「うん、いい子ね」

なでなでされるの案外良いもんだね…

少佐『愛されていますね、大佐殿』

第2話 妹と引越し

数ヶ月後：

レーベ side

アインツベルン城 レーベの自室

やあ諸君！ レーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。3歳になったよ！

何か知らんが母さんから正式に認められた？ ので次の武装を作っているところだ。

少佐『しかし今回は機関銃ですが』

そう、今僕が組み立ててるのは我がドイツの傑作機関銃 グロスフスMG42をレーザー機関銃にするべく改造中だ、と言つてももう発射機構であるパルスレーザーは搭載済みであり、あとは弾倉型のバッテリーを取り付けるだけなのだが：

レーベ「バッテリームズい：」

少佐『では本棚で作り方をもう一度ご覧になつてはいかがでしょう？』

それもそうか：

よし行くぞ！

レーベの知識層 通称本棚

本棚とはレーベが転生する際に少佐から貰った物のひとつ、ありとあらゆる兵器の知識のことだ。

少佐は1度にすべての知識を頭にインプットするのは危険と判断し、このような形にし、逐次レーベに知識を吸収して貰うようにした。

(イメージとしては仮面○イダーWの星の本棚が1番近いですby作者)

さてバッテリー関連の本は： ああ、あつたあつた。

ふむふむなるほど、よしだいたい分かった。

ついでだからもう少し他のも見えていくか：

少佐『大佐殿、切嗣氏が向かって来てます、そろそろ戻られた方がよろしいのでは？

』

マジか、流石にここまでバレるのはよろしくないな、分かった戻るよ。

再びアインツベルン城 レーベの自室

ふう、戻ってきたか。

切嗣「レーベ、入るよ」

お、来たか。

レーベ「どうしたの？」

切嗣「いや、レーベに見てほしいものがあってね、ちよつと来てもらえないかな？
見てほしいもの？ なんだろう？」

レーベ「分かったよ」

数分後…

アインツベルン城 とある一室

切嗣「ここだ、さあ入って」

レーベ「はいよ、でもここに何が…」

一応城の中はあらかじめ探検したから部屋の中は知ってるけど…

アイリ「あ、来たのねレーベ」

レーベ「あれ？ 母さん？ 入院してたはずじゃ…」

少佐『ええ、確かに数ヶ月前からご入院なされていたはずですよ』

だよね？ 僕の記憶が間違ってるわけじゃないよね？

アイリ「残念ね、トリツクよ！ …ごめんね嘘ついた、さつき帰って来たのよ、ほら

こつちおいで」

と言われたので行ってみる。

ギユッ

アイリ「久しぶりね、ちよつと背も伸びた？」
もはや恒例になりつつある抱きしめ&なでなで。
これが割と心地よいんだよね」

少佐『大佐殿、少し幼児化していませんか…？』

はっ!! いかんいかん、ありがとう少佐、少し精神年齢が下がったようだ。

…早く元の年齢に戻りたい：

アイリ「それにまたいけない事してた？」

さらにMGのこともバレたよ！

本当に母さん、超兵器より怖いよ…

レーベ「な、何もしてないよ」

とりあえずしらを切っておく。

アイリ「ほんとかなく？ まあいいわ。ほら見て」

レーベ「？ 何？」

何か隣のベビーベッド的なやつを覗かされた。

中には生まれてまだ数ヶ月も経っていないであろう赤ちゃんが眠っていた。

アイリ「可愛いでしょ？ レーベの妹よ」

レーベ「僕の妹？」

妹か… いや兄は経験ないぞ？ 前世は一人っ子だったからな。
大丈夫かな…

まあ僕はいいつのようにシスコンにはならないだろうけど。

少佐『大丈夫でしょう、可愛がってあげてください』

もちろんさあゝ

切嗣「ああ、そうだ、今日からレーベはお兄ちゃんだな」

レーベ「あ、父さん居たのね」

切嗣「……」

何か父さんがこの世の終わりみたいな顔してたけどまあいいか。

これから宜しくね、えーと…

あ、まだ名前聞いてないじゃん。

レーベ「母さん、この子の名前は？」

アイリ「えっ？ ああ、まだ言ってなかったわね。」

この子はイリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ」

ふむ、イリヤちゃんというのか。

じゃあ改めて宜しく、イリヤちゃん。

だいたい一ヶ月後辺り

アインツベルン城

やあ諸君、最近キング・クリムゾン多用で申し訳ないね。

で、僕が今何してるかというところと荷造りの真つ最中だ。

旅行じゃないよ、引越しらしい。

僕も最近知ったからね、よく分からないがもう家もできているらしい。

で、いつ知ったのかというと、数日前の夕食の時……

アイリ「はい！　じゃあレーベに重大発表があります！」

的な感じで切り出された。

レーベ「重大発表？」

切嗣「うん、突然だけど僕達は日本に引っ越すことになったんだ」

お、ついにか。

だが… 僕のネオ・グレンシユティム（自室）が…

切嗣「？ 嫌かい？」

レーベ「いや、引越し自体は別になんだけど、研究所（自室）が無くなるのがちよつとね…」

アイリ「大丈夫よレーベ、向こうの家めちゃんと用意してあるから」

マジか、ならいいや！ 日本？ ぜひ行きましょう！

アイリ「だからレーベにら2、3日で荷造りしてもらいたいだよ、お願い出来る？」
レーベ「分かった」

こういう感じだったな。

で、さつきも言った通り荷物をまとめてるって感じ。

少佐『ですがこれまで作った武装はどうします？ 聞くところによりますと日本では持つだけで犯罪になるらしいのですが…』

別に弾丸が撃てる訳でもないし、モデルガンで通ると思うよ？

少佐『それもそうですか』

まあ念の為、X線検査を無効化する「ふしぎなはこ」に入れとくけどね。

少佐『それ絶対世に出さないで下さいね…』

さて荷物はこんなものか、母さんに終わったって言いに行こう。

数分後：

アインツベルン城 アイリの部屋

コンコン

アイリ「開いてるわよ〜」

ふむ、良いみたいだね。

レーベ「入るよ」

おお、母さんの部屋が広くなってる！

アイリ「どうしたのレーベ？」

レーベ「荷造り終わったから報告に来た」

アイリ「そう、分かったわ。じゃあ運び出してくるからちよつとイリヤ見てて」

レーベ「分かった」

そう言つて母さんが出ていった。

少佐『しかしイリヤスフィール嬢の面倒を見ると言われましても…』

うん、寝てるからねあの子。

ぶつちやけやる事ないよ、でもここは兄としてちゃんと見ておいてあげないとね。

というわけでイリヤのベッドまで来たよ。

少佐『やはり眠つておられ…ッ！』

？ 少佐？ どうかした？

少佐『い、いえ、何でもありません』

そう、ならいいけど。

ああ、それにしても可愛いなく（なでなで

少佐 side

少佐の作り出した空間

以前、レーベが飛び込んだ穴は無く、同じ位置に六角形の蒼い透明な板が浮かんでお

り、その板の上にはテーブルと椅子が置かれてあった。

おかしい、一ヶ月前にはイリヤスフィール嬢からきちんと確認されていた魔力などが観測出来なくなっている。

それに大佐殿も一瞬観測出来たがすぐに反応が途絶えた。

少佐「何がどうなっているのです…」

ああ、頭が痛い。

このままではやがて来るであろうXデーに対抗出来ない…

何が原因だ？ 意図的に誰かに隠された？ 一体なんのために…

??? 「なにか悩み事？」

そう言っただけ聞いてくのは椅子に座っている少女、私の姉だ。

少佐「ええ、大佐殿とイリヤスフィール嬢の魔力に関して少し。 姉さんはどう思う

？」

流石に僕一人では処理出来ない。

姉さんの知恵を借りることにしよう。

??? 「生まれた順では貴方が兄でしょう… まあいいわ、私も分からないけどこれだけ

は言えるわ、パパとイリヤちゃんから魔力反応が途絶えた事と今回の引越しは繋がりが

あるわ」

少佐「性能的には姉さんが上だからね。それよりその仮説はどこから来てるの？」

「???」
「勘よ」

さいですか… あれか、女の勘というやつですか…

??? 「まあ今は情報収集に務めなさい、私も出来る限り手伝うから」

少佐「ありがとう姉さん、じゃあ私はそろそろ戻るよ」

??? 「分かったわ、パパをよろしくね」

少佐「言われずとも」

さて姉さんに言われた通り情報を集めますか！

第3話 新たなる戦友

数ヶ月後：

レーベ side

冬木市 レーベの地下室

引越し完了！

いやあー、まさか地下室を丸々貰えるとは思わなかったよ！

これで思いつき開発が出来るな。

それと皆様に報告があります。

前回、シスコンにはならないと言いましたが：

見事にフラグ回収してしまいました：

イリヤめちやくちや可愛いです！

おつと申し遅れました、レーベレヒト・フォン・アインツベルンです。

少佐『あなたは幼○戦記のタ○ニヤさんですか： 共通点転生者ってことくらいです

よ？』

うっせ、そっちだって一個大隊率いてロンドン焼きに行つてそんな名前してるくせ

に。

少佐『そつちも名前以外の共通点メガネくらいじゃないですか!』

まあ細かいことは気にすんなよ、白髪になるよ?

少佐『大佐殿は素で白髪じゃ無いですか』

まあね、さてこの話はこの辺にしておいて、今日も色々作って行きますか!

少佐『ふむ、今回は何をカスタムするのです?』

いやまだ決まってるないんだ、これから本棚で探そうと思つて。

拳銃とMG42があるから防御用の武器を作りたいね。

じゃあ少佐、本棚に連れて行つてくれ。

少佐『分かりました』

本棚 防衛関連の列

レーベ 「やっぱりこれか」

僕はとある1冊を読みながら呟く。

少佐 『超重力砲電磁防壁ですか、確かにそれならば大体の攻撃は防げますね。

大佐殿の装置の規模ですと流石に艦砲クラスになると無理ですが』

だよな。 まあ僕の主敵は魔術師らし i :

あ。

少佐 『大佐殿？ どうされました？』

そう言えばもうかれこれ4年弱になるけど僕魔術関連の本読んでないじゃないか。

少佐 『そう言えばそうですね、大佐殿が動けなかった時も科学側の本ばかり読んでい

られましたからね』

だよな？ 失敗したな… 主敵は魔術師なのに全然その情報を集めなかったとは、

僕としたことが。

それに防壁を作るなら魔術側にも効果が無くちや意味が無い。

したらば…

レーベ 「少佐、今すぐに魔術関連の列に案内してくれ」

少佐 『分かりました、ご案内します』

数分後…

本棚 科学魔術境界線

少佐 『あとはそこを左に曲がれば魔術側へと続く連絡通路があるはずですよ』

了解、左ね…つて少佐、何も無いんですけど？

少佐 『はい？ 地図では確かにそこですよ』

うん、いかにも通路ありそうな本棚の配列だけどさ、何か不自然に塞がれたような感じになってるんだよね。

少佐 『ふむ… 分かりました、少々お待ちを。 私もそちらに向かいますので』
了解。

数分後…

何か走る音が聞こえるな？

お、きたきた。

少佐「お待たせしました」

レーベ「問題ないよ。で、これが件の壁だけど…」

少佐「拝見致します」

そう言つて少佐が壁を触ったり叩いたりし始めた。

てかその機材どこから持ってきたの!?

まあいいか、さて僕は…

ん？　ここよく見たら僕が死んだあとの年代の兵器じゃないか、どれどれ…

またまた数分後…

現在地変わらず

ふむふむなるほど、たった2、3年で進化するもんだな…

お、あいつが開発した艦か、どれどれ。

うわ、やりすぎ…　なんだよ三胴空中航空戦艦って、自重しろよ…

少佐「大佐殿？」

レーベ「ん？ ああ、悪い少佐、集中しすぎたようだ、終わったの？」

少佐「ええ、あれはどうやら相当ハイレベルな魔術の障壁ですね、かなりの魔力反応が観測出来ました」

マジかよ。

全く誰だよ、こんなことしたのはさ。

まあいい…

レーベ「突破は出来そう？」

少佐「可能です、今すぐにも実行出来ます」

さすが少佐、頼りになる。

レーベ「じゃあやってくれ、一刻も早く魔術関連の本が読みたい」

少佐「分かりました、では少し下がってください」

はいはい。

で、下がった方がいいが少佐何する気だ？

少佐「それと言いついては忘れていましたがもしかすると軽い頭痛がするかも知れませんが、御容赦ください」

レーベ「分かった」

僕がそう言う…

少佐「はあ！」

ドォーン!!

痛っ。

じゃなくてはあ!?

少佐が思い切りパンチしたら爆音と共に壁が崩れ落ちた!?

少佐「終わりましたよ」

……少佐だけは怒らせないでおこう。

レーベ「良し、では先に行くk……」

???「何だ何だ? すげー音したが……」

レ・少「は?」

少佐「おかしいですね、ここには私達以外は決して入って来れないはずですが……ッ!」

嘘だろおい……

何で僕が2人もいるんだ!?! 何か髪と目の色違うけど……

???「ん? 誰だお前ら?」

レーベ「君こそ誰だい?」

???「俺? 俺はレーベレヒト・フォン・アインツベルンだが?」

やっぱり僕かよ……

レーベ「それは僕の名前なんだがね」

レーベ? 「は? って何だ、そっち側の俺かよ」

何か僕をみた瞬間そう言ってきた。

はい? そちら側の俺? ますます意味が分からん:

少佐「あなた、何か知っているんですか? 」

レーベ? 「まあ、色々とな。話してやっても良いがここじや何だ。

おい銀髪メガネ! どつかいい所へ連れて行つてくれ」

おいこら! 少佐を怒らせたらまずいですよ!?

少佐「銀髪メガネ: まあ良いでしょう、例の空間にご案内しましょう」

少佐が作り出した空間

というわけで僕は久々に(と言っても2、3年前は頻繁にここに来て本読みながら少佐の淹れたコーヒーとか飲んでたんだがな)この空間にやって来た。

円形のテーブルの反対側に座るのは自称僕の男、少佐は僕の側に立っている。

少佐「では知つてゐることを聞かせてもらいましようか？」

レーベ「いいぜ、つつても何から話すかな… まあまずは俺のことからだな」

ほう？ まあそこからだよな。

レーベ「俺は封印される前のお前の人格、言うなれば魔術側のお前だ」

少佐「やはりそうですか…」

レーベ「知つていたの少佐？」

何で早く教えてくれなかったのさ少佐!?

少佐「ええ、私も半信半疑でしたからお伝えはしていませんでしたがアインツベルン家は魔術側ではそこそこの名の通つた家なのです。そこに生まれた大佐殿なら相当量の魔力があるはずですが…」

ですが？

少佐「その反応はまるでパルス波のように転生直後一瞬だけ観測され、後は反応無しになりました。」

まさか封印されていたとは…」

レーベ「まあそんなとこだな。」

で、なぜそんなことになつたかというのだな、お前、聖杯戦争つて聞いたことあるか

「？」

ん？ 急に厨二なこと言い始めたぞ？ 大丈夫か？

レーベ 「いや、ないね」

レーベ？ 「そうか、聖杯戦争ってのはな、その聖杯をめぐる7人のマスターとそのサーヴァントが殺し合いをするものだ。

サーヴァントに関しては今回は置いとくぜ。

で、その聖杯なんだが、手に入ればどんな願いも叶うっていう代物だ。

まあ、俺からすれば胡散臭いの一言だがな」

確かにうさんくせエ：

レーベ？ 「で、ここからが封印された理由だが、実は俺とイリヤ、まあお前もだな、これらの人間はその聖杯戦争の道具として作られた。

所謂人造人間だな、特にイリヤは聖杯そのものとしてな」

なんだと… あの大天使を道具として扱うとは、許せん！

レーベ 「じゃあ君は？」

レーベ？ 「おおい、他人事見たく言うなよ、お前もだ。

俺達は聖杯が、つまりイリヤが何者かに脅かされた時のためのアインツベルン家の最高戦力として作られた。

単騎でサーヴァントを圧倒できる火力、装甲、機動を兼ね備えた、いわば核ミサイルだな」

マジか、じゃあその核ミサイルでも壊せなかつた壁を一撃で粉碎した少佐って一体何者…

レーベ？「だが母さん達はそれを良しとしなかつた。

だからお前とイリヤの魔術側の繋がりを全て封印して、アインツベルンを出てこい、冬木市に引越したって感じだ。

俺が知ってることはこれだけだな、ふう、初めて人と会話したから疲れた。

まあ案外楽しいがな」

初めて!?

ああでもそうか、僕がこの世界に来た時にもう封印されていたと考えれば喋れないか。

じゃあ質問を…

少佐「では封印が解かれた今、あなたはどのようなのです？」

少佐が先に聞いてくれた。

レーベ？「どうもしないぜ、母さん達に望まれているのはお前だからな、今更身体を取り返そうなんて思っていない」

うわあ、諦めてるよこの人。

レーベ「じゃあここにいて僕のサポートをしてくれよ」

正直その核ミサイルを豪語する腕っ節で僕を助けて欲しいしね。

レーベ? 「……おいおい何の冗談だ? 自分のもうひとつの人格なんて気持ち悪いとか思わないのか? 」

レーベ「ふむ、じゃあこうしよう、僕の質問の答えで判断しよう」

レーベ? 「質問? いいぜ」

許可は降りた。

さてじゃあ言うか。

レーベ「君にとってイリヤはどういう存在だ? 」

やっぱりこれだ、もしイリヤを蔑ろにするようなやつならこの話はなしだ、さてどうする? 」

レーベ? 「ふつ、面白い質問だな。

そうだな、俺もお前の答えが聞きたい、だからせーので言おうぜ? 」

ふむ、面白い。

とりあえず頷く。

レーベ「じゃあ行くよ、せーの! 」

レーベ「最愛の妹にして大天使！」

レーベ「最愛の妹にして女神！」

レ・レ？「……………」

レーベ？「まあつまり…」

レーベ「こういう事だね」

そう言って近づくと2人。

そして…

レ・レ？「同志よ！」

思い切り握手した。

数分後…

レーベ？「いや悪い悪い、つい嬉しくてな」

レーベ「いやこちらこそ申し訳ない、つい喜びすぎた」
まさか同志だったとは…

くそ、僕としたことが今まで気づかなかった…

レーベ「じゃあ君はここにいてくれるんだね？」

レーベ？「ああ、居させてもらうぜ」

というわけだ、頼んだよ少佐。

レーベ「じゃあ改めて宜しく、えーと… なんて呼べば良いんだ？」

レーベ？「あ、そうか、お互いレーベレヒトじゃややこしいからな。

うーん、じゃあさお前らどっちか新しい名前くれよ」

ふむ、新しい名前か、何が良いかな…

少佐「ではこういうのはどうでしょう？」

お、少佐何か良いのがあるのかな？

少佐「大佐殿がレーベレヒトですのでZ3、マックスでいかがでしょうか？」

レーベ？「マックス、マックスか… 悪くないな、じゃあ俺は今日からマックス・フォ

ン・アインツベルンだぜ！」

レーベ「じゃあ宜しくたのむよ、改めてましてレーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。レーベとでも呼んでくれ」

少佐「私の事は少佐とお呼びください」
マックス「ああ、分かった。宜しくたのむぜ、レーベ、少佐」

第4話 資材源

数年後：

冬木市 レーベの地下室

足し算や引き算、ひらがななどをもう一度教えられるのは退屈だと思いませんか？
僕は現在体験しております。

申し遅れました、レーベレヒト・フォン・アインツベルンです。

マックス『気に入ったのか？ その挨拶』

まあね、そんなことより諸君。

さつき述べた通り僕は現在小学一年生で毎日退屈している。

いやだつてさ、ひらがなや計算つてやってもつまらないんだもん。

少佐『まあ、計算はともかくとして大佐殿いつ日本語なんか覚えたのです？』

ああ、少佐は知らなかったつけ。

前世でグレンシユティムに入る時に友人と一緒に日本に研修に行ったからね、その時に。

マックス『へえー、研究所漬けの同志にも友人がいたとはね』

うっせ、友人くらいいるよ。

すごいやり手のやつでさ、仕事しながら日本で恋人作ってたんだよ？

マックス『でwww、同志はwww？』

こんなオタクに彼女出来るわけ無いだろ！（持っていたペンを投げながら）

チキショーメ!!

少佐『ご、ご愁傷様です…（でも姉さんが聞いたら喜びそう）』

はあ… まあいいや、さてじゃあここ2年間の報告と行きますか。

マックス『お、そうだな』

まず銃火器だがルガーP08とワルサーP38、MG42に加えて新たにMG3、M

134、PSG-1、このくらいかな？

ちなみにいずれもレーザー銃で、バッテリーが切れたら魔力で撃てるように改造したよ。

マックス『おいまで、新しく加わった銃の本体どつから持ってきた!?』

MG3はアインツベルン城のガラクタの山の中にあった。

PSG-1はAmOzonでモデルガンを中古で買った、安かったよ。

M134は父さんに頼んで本体だけ本物を用意して貰った。

マックス『父さん何やってんだよ…』

何か僕がイリヤを抱っこして写った写真をあげたら「まってる、すぐに用意してやる」って言って数日後に宅配で送られてきた。

少佐『切嗣氏エ…』

何かその写真を大事そうに持ってたな…

まあいいや、次。

少佐『防御兵装でしょうか？』

そうだね、こっちは新参者ばかりだよ、超重力電磁防壁とクラインフィールドを内蔵した白衣とミラーリングシステムを内蔵した腕章を作った、こっちも電力が切れたら魔力で作動するようにしてあるよ。

マックス『防御は申し分無いな、てかあれだろ？ 超重力電磁防壁って艦砲クラスの

破壊力持ってなきや突破出来ないやつだろ？』

まあそだね、なかなかオーバーベースペックだね。

マックス『つかミラーリングシステム要らんだろ、仕様書読んだが使う機会ほぼ無いぜ？』

それは重々承知しているよ、でも念の為にね。

少佐『まあ、備えあれば憂いなしと言いますしね』

でしょ？ でかいものはこのくらいだな、後はナイフとMGに付ける銃剣とか光子榴

弾グレネードランチャーとかだな。

マックス『おい、どうやってMGに銃剣とかグレラン付けるんだよ』
もう付けられるように改造済み。

いつでも撃てるよ。

少佐『順調ですな』

いやまあここまではね：

マックス『？ 何かあったのか？』

いやね、資材が無くなりました：

今までアインツベルン城から持ってきたガラクタを騙し騙し使っていたんだけど：

少佐『今回の開発で無くなってしまったという訳ですね？』

そうなんだよ： どうしよう：

これじゃあなにも作れないどころか今ある武装の予備だつて：

少佐『まあまあそう落ち込まないで下さい大佐殿、もしかしたらあるかもしれません

よ？ 資材』

え!! あるの!? どこに!?

マックス『俺にも教えろよ少佐!』

少佐『実はですね、先日この街をスキャンしましたら山のある1点からそこそこ強力

な金属反応がありましたてすね。

もしかしたらその物品が使えるかも知れませんが」

なんですと!?! どうしてもっと早く教えてくれなかつのさ!

よし! 今から行こう!

マックス『馬鹿か、もう夕方だぞ! 日が登っているうちに帰って来るのは不可能だ

!』

だよね…

少佐『まあ、あの規模ですと1日では撤去されないでしょう。明日行ってみては?

』

そうだな…

そうするとしますか。

じゃあこの辺片付けてつと。

セラ「レーベさん! ご飯ですよ!」

そうやって僕を呼ぶのはセラさん、アインツベルンのメイドさん…らしいが…

少佐『ほぼ家政婦と変わりませんね…』

マックス『だな』

レーベ「分かった、すぐに行くよ!」

翌日

よし、では行くか。

マックス『同志、そんな装備で大丈夫か？』

大丈夫だ問題ない。

今回は調査が目的だからね、本当はこのウエストポーチも要らないくらいだけど小物を何個か持って帰って来れないかなと思ってね。

少佐『今思い切りフラグ建てましたが…』

こまけえこたあ良いんだよ。

さて行きますか。

セラ「あら？ レーベさん出かけるのですか？」

レーベ「ああ、セラさんか。うん、ちよつと山の方まで、日没までには戻るから」
セラ「そうですか、分かりました、お気をつけて」

レーベ「言われずとも、では行ってk…」

???「あれ？ お兄ちゃんどこ行くの？」

マックス『女神降臨！』

少佐『マックスさん、落ち着いてください！』

リビングの方から出てきたのは皆さんご存知僕らの大天使、イリヤ。

レーベ「うん、山の方に探検しにね」

レ・マ「(ああ、癒される…)」

イリヤ「イリヤも行っていい？」

と申されていますが少佐、大丈夫なの？

少佐『そうですね、もしかすると有毒物質もあるかもしれませんが、例の白衣をもつ大佐殿はともかく3歳になったばかりのイリヤスフィール嬢には危険かと…』

だよね… 仕方ない、ここは心を鬼に…

レーベ「来てもつまらないよ？」

出来ませんでした。

イリヤ「ダメ？」

いやいやいや、イリヤさん！ それ反則ですから！

あなた様の上目遣い＋首傾げは波動砲並の破壊力がありますから！

マックス『ごぶっ（吐血）』

少佐『マックスさんが吐いた!? イリヤスフィール嬢、恐ろしい子!』

レーベ「いや大丈夫だよ、待ってるから準備しておいで」

ああ、あれには逆らえませんが…

イリヤ「うん、ありがとう！ お兄ちゃん大好き！」

そう言つて走つていった、相変わらず速い。

マックス『ごぼあ（大量吐血）』

少佐『マックスさんめちやくちや吐いた!?!』

ちよいちよい君ら、いつまでギャ○漫画○和のノリやつてんだよ。

マックス『お前にはわからないのか… あの可愛さが…』

あ、生きてたのね。

もちろん分かるよ、正直あの最後の大好きはやばかった。

マックス『だろ?』

さて、イリヤが来るなら僕も相応の準備をしますかね。

数十分後…

山 反応のあつた付近

イリヤ「お兄ちゃん、どこまで行くの？」

レーベ「うん？ もうすぐだよ」

ああ、可愛い。

マックス『羨ましいぞ同志！ イリヤと手をつないでいるなんてさ！』

何を言う？ これは兄の特権だよ（勝ち誇り）。

マックス『チキショーメ!!』

少佐『（無視）大佐殿、そろそろ目的地につきます』

了解。

お、何か森が切れてるな。

山 反応があつた場所

こ、これは…

マックス『うひょー、ある意味絶景だな』

目の前にはガラクタの山、いや海が広がっていた。

少佐『恐らく私達が来る前からある不法投棄の山でしょう、トラックのものとと思われるタイヤ痕があります、民間の業者も捨てに来ているのでしょうか？』

分からんが想像以上だなこれは…

マックス『これだけありや当分資材には困らないんじやねえか？』

だね。

イリヤ「お兄ちゃん、これなあに？」

レーベ「多分イリヤが生まれる前からあるゴミの山だよ、全く誰がこんなことしたん

だろう？」

イリヤ「ふーん、あ！」

レーベ「イリヤ、どうしたの？」

急に走らないでよ、びっくりするじゃないか…

イリヤ「これ…」

うん、これは… クマのぬいぐるみ？

イリヤ「持って帰って良い？」

あー、ところどころ破けてるが直せば良いか、少佐、後で裁縫の棚に案内してね。

少佐『分かりました』

レーベ「良いよ、その代わり母さんやセラさんに内緒にね」

イリヤ「うん！」

うんいい子。

マックス『同志イ！ イリヤの頭を撫でるとは何たる羨ましいことを…』

兄の特権だ。

レーベ「じゃあ僕も何か探してくるから、もうちよつと待っててね」

イリヤ「うん！」

数十分後：

少佐『大佐殿、そろそろお戻りになられては？
そうだね、掘り出し物も見つかつたし。』

レーベ「イリヤ、そろそろ帰ろうか？」

イリヤ「はい、きやあ！」

レーベ「イリヤ!？」

少佐『ああ、コケちやいましたか』

怪我してなきやいいが：

レーベ「イリヤ、大丈夫？」

イリヤ「うう… 痛い…」

マックス『同志！ 左膝！』

え？ あ！傷が！

レーベ「イリヤ、ちよつと左膝見せてくれる？」

イリヤ「うん…」

少佐、どう？

少佐『軽い擦り傷です、大佐殿の手持ちのキットで十分対応可能です』
了解。

レーベ「ちよつと染みるかもしれないけど我慢してね」

えーとまず、持ってきたペットボトルの水で傷を洗いまして、そこにガーゼに染み込ませた消毒液を当てましてつと。

イリヤ「あ…う…」

レーベ「ごめん、やっぱり痛かった？」

イリヤ「ううん、大丈夫」

ごめんよ、出来るだけ速く終わらせるから…

よし、後は絆創膏を貼りまして…

レーベ「はいおしまい、立てる？」

イリヤ「お兄ちゃんおんぶして？」

レーベ「いいよ、しっかり掴まっているんだよ？ あとぬいぐるみさ、帰ったらちよつと貸してね、直してあげるから」

イリヤ「うん、ありがとうお兄ちゃん」

レーベ「どういたしまして」

というわけでイリヤをおぶって帰ります。
少佐、マックスを取り押さえておいてね。
少佐『分かりました』

第5話 目覚める能力

数年後…

冬木市 穂群原学園小等部4年1組

本当にキング・クリムゾン多用で申し訳ない、あいにく原作開始までは多分この感じだ。

申し遅れたね、レーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。

小学四年生になったよ、つまりイリヤが1年生だね。

年が上がったおかげで出来ることが増えたよ。

少佐『もう何もつつこみませんからね…』

マックス『飽きられるぞそのうち』

大丈夫、もう飽きられてるから。

少佐『いや大問題じゃ無いですか』

こまけえこたあ良いんだよ。

それよりさ、この前本棚の未来兵器の棚漁ってたらかんなやつ見つけたんだよ。

マックス『？ えーとこれは… ビット？』

マックス『脳波コントロールの浮遊砲台みたいですね、レーザーはもちろん剣になったり、複数個で防壁を作ったり出来る万能兵器ですね』

ああ、これをちよいと改良してき。

レーザー発射機構などは普通に作ってき、浮遊とコントロールを魔術側に任せたら火力も確保出来なくない？

少佐『どうなのでしょう、確かに火力を上げるには画期的な手法だとは思いますが…』
マックス『いや、良いアイデアだと思っぜ。』

浮遊とコントロールのみならそこまで魔力は消費しない、今の同志の魔力量なら自然回復の範囲内だ。

発射側のエネルギーさえ持つのなら、半永久的に撃つことが可能だ』

その辺は心配ない、空いたスペースに機関としてエターナルサイクラーをうめこむから。

少佐『いざとなればその機関を自爆させることも可能… なかなか恐ろしい代物になりましたね』

でしよう？

じゃあ放課後に例の場所行くぞ。

少佐『了解です』

マックス『俺ら山さ行くだ』

よし、放課後が楽しみだ！

先生「はい、じゃあこの問題を… レーベ君、解いてくれるかな？」

レーベ「分かりました」

先に授業を乗り切らなきゃだが…

放課後…

山 不法投棄現場

イリヤと途中で分かれて僕は少佐達と山に来ていた。

それで部品を漁ってたらふと思つた。

ここ何年かでもここも大分片付いてきたな、と。

少佐『大佐殿が色々持って帰りますからね。』

まあそれでも捨てに来る量の方が多くて無くなりそうにもありませんが…』
結構結構、部品が増えるのは良いことだ。

最近の物はほんの些細なものでもなかなか良い部品が取れるからな。
さて、こんな物か。

少佐『流石に本体に使える様なアルミニウム板はありませんか…』

それは良いよ、この装備じゃ持って帰れないしね。

それにまだこの前切り出したジュラルミン板があつたはずだし、何個か有望な板は一
応雨に濡れないようにしてきたから大丈夫だよ。

じゃあ帰るか、もう持てないし。

マックス『ランドセルがパンパンだぜえ…』

少佐『分かりました』

というわけで僕は山を降りた。

その帰り道

少佐『？ 大佐殿、あの方イリヤスフィール嬢ではありませんか？』

え？ あ、本当だ。

お使いでも頼まれたのかな？

マックス『みたいだな、そこそこ重そうだな』

だね、持つてあげなきや（使命感）

レーベ「おーい、イリヤ〜」

イリヤ「あ、お兄ちゃん、またいつもの山？」

少佐『読まれてますね』

まあ、これだけ頻繁に行っていていればね。

レーベ「そうだよ、そっちはお使いか何か？」

イリヤ「うん、セラに頼まれちゃって」

レーベ「ふうん、それ持つよ？」

流石に小一にはきつそうだからね。

イリヤ「え？ 良いの？」

レーベ「もちろん」

兄に遠慮してどうするのさ。

マックス『お、そうだな』

イリヤ「じゃあお願い」

任された。

というわけでイリヤと一緒に帰るよ。

マックス『羨ましい…』

少佐『あなたはまだ妬んでいるのですか…』

数分後…

帰り道 交差点

家の近くの交差点、信号などない小さなものだった。

その交差点で事件は起きた。

イリヤ「お兄ちゃん、はやくはやく〜」

相変わらず速いな：

少佐『感心してる場合ですか？　いくら交通量が少ないとはいえ、危ない気がするの

ですが…』

だね。

マックス『早く止めよu：　ッ！　同志！』

なっ!?

イリヤが交差点を渡ろうとした時、運悪く曲がって来た車があった。

僕はそれを見たとき認識した時には既に走り出していた。

多分反射のようなものだろう。

だが僕は運動が得意なわけでは無い、ランドセルと持っていた買い物袋を切り離して

も小四の足ではたかが知れてる、間に合うはずもなく：

レーベ「イリヤアアア！」

叫ぶしかできなかった。

だがそれで状況が変わるほど現実には優しくなく、ついにあと数秒でイリヤが車にひか

れるなんて考えると思わず目をつぶってしまった。

その時：

レーベ「なっ?!? ここは：」

再び目を開けると僕は全ての始まりの場所、いつも少佐やマックスとバカやつてる空間に立っていた。

だがそこに少佐はおらず：

??? 「ふふ、ようやく会えたね。 パパ」

銀髪の少女が佇んでいた。

レーベ「はい？ パパ？ 僕に娘はいませんよ？ それより少佐は何処です？ 僕は

一刻も早く戻らなくては」

そうしないとイリヤが：

??? 「今は外の時間とここは遮断されてるから心配ご無用よ。

それで戻って何するの？ パパが戻っても妹ちゃんがペしやんにされる結末は変わらないわ」

レーベ「や、やって見なきやわからないじゃないか！」

まだ数%の可能性くらい：

??? 「ううん、やらなくても分かるわ。 賢いパパなら分かるんじゃない？ 絶対に

合わないって」

うるさいうるさいうるさい!

レーベ「そんなこと言われずとも分かっているよ! だが分かっているのと認めるのは違う!」

???「ね? 分かっているけど認めたく無いんでしょ? だったら手に入れてから戻るべきじゃない? そのどうしようもない結末を変える力を、ね」

何だよそれ:

レーベ「そんなものがあるのか?」

???「もちろん、パパもよく知っているものだと思うわ。

使い方は自然に分かるようになると思うから」

そう言って近づいてきた。

え!?! ちよっ、何する気!?

???「しっかり受け取ってね」

チュッ

はい!?! ほっぺたキス!?! わけがわからないよ!?

???「受け渡し完了、じゃあ頑張ってるね。」

応援してるわ、パパ」

そう言つて僕の目を静かに閉じる。

再び目を開けると空間に入る前の光景が飛び込んできたが、さつきと何かが変わつていた。

少佐『大佐殿?! 今までどちらに!?!』

少佐、まあ見ててくれ。

しかし本当に使い方が分かるな…

まあいい、ありがたく使わせてもらおう。

レーベ「限定武装^{アド} シュトウルムヴェイント」

次の瞬間、僕が地面を蹴ると走るというより飛び出すと言つた方が近い動きになつた。

少佐曰く、それはまさに暴風そのものだったらしい。

僕はそのスピードで車に轆かれる前にイリヤを包み込むように抱きかかえて道路の反対側にたどり着いた。

最短ルートで滑るように走つたため、ブロック塀に背中をぶつけたがなんてことは無い。

イリヤが無事ならそれで良い。

少佐『大佐殿! ご無事ですか!?!』

』

僕はあと、まずイリヤ。

少佐『わ、分かりました。

えーとですね… イリヤスフィール嬢には特に傷はありません、ナイスガードです、大佐殿』

コロンビア。

少佐『大佐殿もふざけられるようでしたら問題なさそうですね』

最近少佐が冷たい…

数分後…

同地点

あの後、車の運転手の人と軽く話をし、僕が心配ないと言うと頷いて去っていった。

イリヤ「お…兄…ちゃん…？」

「

レーベ「? どうしたの?」

少佐、やっぱりどこか怪我してたんじや…

少佐『いえ、私の調べは完璧なはずですよ』
だよ。

イリヤ「ごめんなさい… 私がもつと注意していれば…」

ああ、何だそんな事か。

レーベ「あまり気に病ま無いようにね、次気をつけていけば良いんだよ」

そう言いつつ、いつぞや母さんにやって貰った様に抱きしめ&なでなでイリヤを落ち着かせる。

イリヤ「でも私のせいでお兄ちゃんが…」

心配してくれるとは… やっぱり大天使。

レーベ「イリヤは優しいね。」

心配ご無用だよ、ほらちゃんと動けるし。

でも心配してくれてありがとう、さてじやあ帰ろうか、立てる?」

イリヤ「うん、…あれ?」

レーベ「? どうしたの?」

少佐ア! やっぱり怪我してるじゃん!

少佐『そんな馬鹿な!?!』

イリヤ「足がすくくんじやって、立てない…」

何だそつちか、ごめん少佐。

少佐『お気になさらず』

レーベ「じゃあおぶってあげるよ、ほら掴まって」

イリヤ「うん」

イリヤが掴まったのを確認するとゆっくり立ち上がる。

うん、背中が若干痛いがまあ大丈夫か。

ちなみにランドセルは前に持ってきて、買い物袋は左手で下げてる。

割と重武装だな。

少佐『フルアーマー大佐殿ですね』

違くない。

そういやマックス生きてる?!

さつきから黙りこくってるけど。

マックス『え? ああ、ちゃんとここにいるぜ』

なら良いんだ。

さて帰りますかね

マックス 『あの力は魔術の類ではない…
一体なんなんだ…？』

第6話 産業革命

数日後：

冬木市 レーベの地下室

やあ諸君、レーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。

今回はキング・クリムゾンを使って無いよ、後半使うかもだけど。

マックス『さて、挨拶はその辺にして新しい武器を作ろうぜ？』

だな、じゃあビットの制作に入ろうか。

えーと前書いた設計図はと… ああ、あった。

じゃあそれをやりながらここ数日の報告といこう。

まずあれだ。

僕はあの一件以来、超兵器の能力の一部と

浮きドック艦 スキズブラズニルの能力を使えるようになった。

超兵器もついてもまだ調べている段階だがスキズブラズニルの能力、核分裂と核融合を組み合わせた資材生産装置の能力に関しては完全に物にした。

それによりあの不法投棄の海の資材が丸ごと使えるようになった。

少佐『あの量でしたら戦車くらい作れそうですね』

いつ使うんだよそれ。

むちゃくちゃ作ってみたいけど…

マックス『同志、別にあの資材、全部持つて帰ってしまったても構わないのだろうか？』

ああ、構わんよ。

それはともかく、その資材とスキズブラズニルのおかげで唯一の懸念であった生産性

の問題が一気に解決、瞬く間に現在ある火器の予備パーツを作れたよ。

少佐『超兵器に関してはそのうち分かるでしょう』

だな。

それともうひとつ報告がある。

実は…

バタン！

イリヤ「お兄ちゃああん！」

そうこれである。

こちらもあるの一件以来、イリヤが僕にべつたりなのだ。
話は数日前、あの事件の夜に遡る…

数日前…

レーベの地下室

少佐『大佐殿、そろそろお休みなさった方がよろしいのでは？』
え？

ああ、もうこんな時間か。

確かにこの身体には遅い時間だな、じゃあ設計図仕上げて寝ますか。
マックス『仕上げるんかいwwww』

まあね、じゃないときり悪いし、それにもう終わったよ。
さて寝ますかね。

コンコン

少佐『どなたでしようか？　こんな時間に』

さあ？

セラさん当たりかな？

レーベ「開いてるよ」

イリヤ「あ、ごめんお兄ちゃん、起こしちやつた？」

あれ、イリヤ？

どうしたんだろう、こんな時間に…

レーベ「いや、これから寝るところだから大丈夫、何か緊急の用事？」

マックス『パジャマイリヤ

キタ——（。△。）——！！』

レ・少「落ち着け！」

イリヤ「あの… その… 今日是一緒に寝てほしいなあつて…」

レ・マ「可愛い…」

レーベ「いいけどどうしたの？　怖い夢でも見たの？」

もちろん僕とイリヤは仲が悪い訳では無いがここまで甘えてくるのは初めてだね。

少佐『まあ当然といえば当然なのは？

あの時の大佐殿の行動といい、発言といい、

イリヤスフィール嬢からすれば白馬の王子様のようなものでしょうし』

マックス『その白馬レーザー撃てそうwww』

そんなものかね？

イリヤ「うん： 今日の方が夢に出てきて： お兄ちゃんが一緒にいてくれたら大丈夫

夫かなくて：」

レーベ「おk把握、じゃあ時間も遅いし、寝ようか」

イリヤ「うん！」

で、2人で寝ることになったのですが：

ギョッ

レーベ「(ね、寝にくい：)」

イリヤに左腕を抱き枕にされ、いつもと勝手が違うため、なかなか寝つけずにいた。

マックス『同志そこ変われ』

や☆だ。

君にここ譲るとイリヤが襲われかねない。

マックス『なんでさ』

少佐『いや当然の判断でしょう!？』

しかし大佐殿、イリヤスフィール嬢とても寝心地良さそうですね』

全くその通りだね。

めちやくちや可愛い。

さて、イリヤに可愛い寝顔も見れた事だし、僕も気合いで寝ますかね。

少佐、悪いがマックスの取り押さえ頼む。

少佐『了解しました、お休みなさい大佐殿』

うん、お休み。

現在

レーベの地下室

といった感じだ、ちなみに翌朝セラさんにめちやくちや怒られた。

まあ、イリヤのフォローのおかげでどうにかなった、代わりにこれからも一緒に寝てって言われた。

良いよって言ったら満面の笑みで喜んでた、可愛い。

それ以降、こうしてイリヤが甘えてくるようになった。

イリヤ「？ お兄ちゃん、どうしたの？」

おっとつい回想で黙り込んでしまった。

レーベ「何でもないよ、それよりどうしたの？」

イリヤ「一緒に遊ぼう！」

レーベ「良いよ、じゃあ片付けて行くから待っててね」

イリヤ「はいい！」

とまあこんな感じに遊びにも良く誘われる、おかげでビット生産が進まない、嬉しい悲鳴である。

数ヶ月後：

レーベの地下室

レ・マ「キング・クリムゾン！」

少佐『2人して何やっているのですか…』

いや、これ含めてあと数回しかキンクリ使えないからさ。

マックス『1回やっておこうかなって』

少佐『はあ、まあ良いです。』

それより大佐殿、私最近ふと思ったのですが…』

ん？ 何少佐？

少佐『ビットの生産を自動化してはいかがでしょうか？』

ふむふむなるほど、一理あるね、確かに数ヶ月たったのにまだ6機目が終わったって
いう感じだしね。

よし、じゃあ貰っている地下室4部屋の内1つを丸々機械室に改造しますか。

早速始めよう、少佐。

少佐『はい』

少佐は僕とマックスが山に資材を取りに行つてゐる間に工作機械の本を何冊か見繕つてほしい。

少佐『分かりました、すぐにご用意致します』

僕とマックスはさつき言った通り資材集めだ、さつそく出かけるよ。

マックス『おかげぼく』

1時間後…

山 不法投棄現場

…というわけでイリヤが一番可愛いのはそのシーンだ！

あの純真無垢な笑みこそ、イリヤの最大の魅力である！

マックス『ぐはっ… やるな、流石同志、だが…』

とまあこんな感じで山に着くまでと作業中に

「第1回 イリヤの魅力をプレゼンしようの会」をマックスとやっていた。
参加者募集中だよ。

ただしね、これ結論から言うのと終わりが見えない。

かれこれ1時間にマックスはなるがまだまだ余裕そうだった。

もう資料集めも終わったぞ： 君まだやる気なのか？

マックス『当たり前だよなあ？』

まあ良いか、帰るまで続けよう。

帰宅後：

レーベの地下室 空き部屋

というわけで少佐からの情報を元に機械を組み立て、今から試験運用するところだ。

少佐『大丈夫だとは思うのですが：』

マックス『まあ、材料が材料だからな。』

上手くいくといいが』

さあどうだ？

ウーーン！

少佐『無事に稼働開始、エラーなどは検知されず。

おめでとうございます大佐殿、成功です！』

やったぜ！

ならビットの生産はこのままで良いな、じゃあちよつとやりたいことあるし、そつちも始めますか。

数分後：

レーベの地下室

マックス『しかし同志、そのリュックサックを使って何を作るんだ？』

』

ああ、これを改造してビットの母機にしようかなってね。

少佐『しかしそれを使うとリュックサックが無くなってしまふのでは？』
心配ご無用、あれ見て。

少佐『おや？ いつの間に新しいリュックサックが…』

この前のバースデープレゼントさ、何でもイリヤが選んでくれたらしい、センスいいねあの子。

マックス『違いねえな』

だから古い方は改造して再利用さ。

少佐『エコですね』

でしょ？

まあぶっちゃけると最大36機のビットを収納出来るものがこれくらいしか無くてね。

マックス『36機!? 正気か同志!?』

ああ、確かに脳波コントロールならばまずいだろうけど、同時進行でこれも作るからね。

僕は棚から別の設計図を取り出し、少佐達に見せる。

少佐『これは… 端末でしょうか？』

ピンポーン！

これのアシストがあればどうにかなるかなって。

少佐『確かにこれならいけますね』

だろ？

さて、少佐から太鼓判をいただいたから頑張りますか！

原作開始！ 鯖対超兵器

第7話 来たるXデー

数年後…

穂群原学園中等部2年1組

キング・クリムゾン！

おはよう諸君、レーベレヒト・フォン・アインツベルンだ。

中学2年になったよ。

マックス『み、右手が…』

おう、そつちじゃねえよ。

ともあれようやく学校の授業が面白くなってきた。

少佐『それより大佐殿、報告があるのでは？』

おつとそうだった。

先日ビットの生産が予定数の36機に到達、一応予備機としてあと12機の生産が決まってるけどね。

それと同時進行で改造リュックサックと腕時計を作成、こつちも完成済みさ。

マックス『もう何も怖くない!』

フラグやめい!

まあこれも全てスキズブラズニルと超兵器の能力のおかげなんだけどね。

少佐『しかし超兵器もそうですがスキズブラズニルが1番破格ですね、任意の物体を同質量の目的の物質に置き換えるなんて…』

まあおかげで前も言ったけどあの山の資材が全部使えるようになったしね。

少佐『まあそれが一番の収穫ですかね』

それに超兵器の能力もようやく使えるようになって来たしね。

キーンコーンコーンコーン

あ、終わった。

今日は部活もないし帰るか。

マックス『だな』

同時刻

イリヤ side

穂群原学園小等部5年1組

こんには皆、イリヤだよ。

挨拶はこのくらいにしてっと、早く行かなきゃ。

というわけでダーツシュ！

50メートル走なら男子にだって負けたことないこの足ならこれくらい余裕だよ！

あつという間に校門に到着、靴を履き替えて外に出て、中等部の校門まで行くと目的の人物がいた。

イリヤ「お兄ちゃん！」

同時刻

レーベ side

初春「ん？ 今日には部活無いかレーベ？」

そう言ってくるのは僕の友人 初春翔。

一言で言うならイケメンだ、実際学校内でも人気は高い、故に周りの男子の悪ふざけの標的にされることもしばしば。

少佐『(大佐殿も人気はあるのですがシスコンなのがバレてますからそういった話に発展しないんですね…)』

レーベ「ああ、無いから帰るよ」

初春「そうか。 お、ちょうど迎えが来たみたいだぞ？ じゃあな」

迎え？

イリヤ「お兄ちゃん！」

何だ、迎えてイリヤの事か。

レーベ「イリヤも今帰り？」

イリヤ「うん！ 一緒に帰ろう！」

断る理由なんてねえよなあ？

マックス『お、そうだな』

レーベ「もちろん、さあ帰ろう」
でも最近手をつないでくれないから寂しい…

十数分後…

イリヤ相変わらず速いよ…

少佐『大佐殿が体力ないだけでは…？』

マックス『どうやって軍に入っただよwwww』

軍と言つても研究所、戦闘とは関係無い部署だよ。

つて言つてゐる間に…

レーベ「到着つと」

イリヤ「ただいま〜」

帰ると洗濯物を取り込んで来たであろうセラさんが玄関にいた。

セラ「おかえりなさいイリヤさん、おやレーベさんも一緒だったのですか」
イリヤ「校門前で会ったからね」

セラ「なるほど。 あ、そう言えばイリヤさん。

先程宅配便が来ましたよ、品名はDVDって書いてありましたけど」

イリヤ「DVD… そっか！ もう届いたんだ！」

お、なんかイリヤが急いでリビングに走っていった。

なんか待ちわびていたものでもあったのかな？

ちよい覗き見…

『愛と正義と仁義の使者！ 魔法少女マジカル☆ブシドームサシ 見参！』

リズ「むう… 両作画…」

そう唸りながらポテチを食べてるのはリズさん、セラさんと同じくアインツベルンから一緒に来たメイドさん… らしいが働きのセラさんと違い、基本リビングのソファに座ってなんか食べてる人。

なお、食べたものは全て胸部の弾薬庫に行く模様。

対してセラさんは仕事で消費される模様。

イリヤ「あーっ！ リズお姉ちゃん勝手に見てる！」

リズ「お、イリヤおかえり」

イリヤ「自分だけ先に見るなんて酷い！」

リス「これのお金出したの、わたし」

イリヤ「そうだけどー！」

マックス『イリヤの抗議を正論で返すとは…』

驚くところかそれ？

しかし何かと思えばアニメのDVDか。

まあ、今どき珍しい事ではないか。

諸君もあるんじゃない？

深い感銘を受けた作品がさ、ちなみに作者は「蒼き〇のアルペジオ」らしい。

セラ「ああ… すっかりイリヤさんも俗世に染まってしまつて…。

奥様たちに留守を任されたというのにこれでは顔向け出来ません…」

レーベ「まあまあ、個人の趣味の問題だしそこまで気にする必要は…」

僕だって部屋が軍艦の模型やラジコン、ポスターがでかかど飾つてありますしおすし。

最近プ〇ステ2で「提督〇決断4」も始めたし…

セラ「何を無責任な！ 兄であるあなたがしつかりしていないからこんなことに…

！」

レーベ「え!? ぼ、僕!? 僕のせい!?」

セラ「当然ですっ!」

ええ…

少佐、これ僕のせいなの?

少佐『いえ、そんなことは… いやしかし…』

セラ「聞いているのですか? だいたいあなたはいつも地下室に閉じこもって…」

ぎやあああ!

少佐! マックス! 助けて!

少佐『申し訳ございませんが不可能です…』

マックス『大人しく説教されろ』

ウソダンドコドーン!

数十分後…

レーベの地下室

ああ、酷い目にあつた：

セラさん良くも悪くも話長いんだよ：

少佐『ご、ご愁傷様です…』

まあいつまで落ち込んでいても仕方ないからね。

さて気を取り直して新兵器を作りますか。

マックス『またかよ、今度は何作るんだ？』

砲だよ。

手持ちの武器じゃ火力特化が光子榴弾しかないからね。

少佐『確かに…』

というわけでこれ作るぞ。

少佐『これは… ビームマグナム？』

これをダウンサイジングして人でも持てるようにする。

同時にこの機構を白衣に搭載する。

マックス『ん？ NT—D：を改造したSV—D？』

サーヴァントデストロイヤーシステムの略称ね、これを作り継続的な火力を手に入れる。

資材はさつきヴォルケンクラツツアーを限定武装^{アームド}して転送した。

本棚で調べて分かった事だが超兵器にはそれぞれ特殊な能力があるらしい。ヴォルケンクラツツアーの場合、時間と空間に干渉、操作らしい。

と言つても今の僕じゃ時間は全然、空間の方も物質転送くらいしか使えない、まあそれでも十二分なのだがな：

少佐『ではさつそく始めましょうか』
だね。

後にレーベはこの部屋の防音性の高さで自分の過剰な集中力を若干恨むはめになる。

同時刻

イリヤ side

お風呂場

うう… 目が痛い…

1クール一気見は流石にやりすぎたかな…

面白かったけど。

イリヤ「魔法…か…」

流石に魔法少女に憧れる歳でも無いけど、あつたら便利だよね〜

空飛べたり宿題片付けたり… ああでも宿題はお兄ちゃんに教えてもらいながらす

る楽しみが減るから無しかな？

他にも…恋の魔法…とか？

イリヤ「ぶはっ、ナシナシ！ それはナシ！

恥ずかしい妄想禁止！」

はあ、むなしい…

イリヤ「ん？」

何あれ、光ってるけど星じゃないし。

花火… でも無いね… なんだろう？

ん…？

あ、そうだ、電気消せば良く見えるかも。

パチ

あれ？ 光ってないな…

あ、あれ… なんか… 近づいて… こっちに来た!?

ガツシャーーン!

???「ああ、よけられてしまいましたか… まあ良いです。

はじめまして！ わたしは愛と正義のマジカルステッキ マジカルルビーちゃんで

す！」

なにこれ!?

杖が喋って…

ルビー「あなたは次なる魔法少女候補に選ばれました！

さあ、わたしを手を取ってください！

力を合わせて悪と戦うのです！」

う、うさんくさい…

ルビー「ああ！ あなた今うさんくさいと思いましたね！ ショックです！」

イリヤ「えっ!?! いや…うん」

ルビー「ああ嘆かわしい… 現代ではもう魔法少女に憧れる少女は絶滅してしまっ

のでしょうか？」

イリヤ「なんだかよく分からないけど……痛っ！」

何？ あ、血が出てる、さっきのかすつちやったかな……

ルビー「どうしました？ おや、血が」

ルビー「（採血完了）」

コンコン

レーベ「イリヤ、大丈夫かい？」

イリヤ「お兄ちゃん？ どうしたの？」

あれ？ まだ地下室に閉じこもって何か作ってたはずなんだけど……

レーベ「飲み物取りに来たら大きな音がしたからさ、ちよつと様子を見に来ただけ

ど…… 何ともない？」

心配してくれてたんだ…… ちよつと嬉しいな……

イリヤ「うん、何ともないよ」

レーベ「そう、ならいいんだけどさ。何かあったら遠慮なく僕に言つてね、じゃあ

ごゆっくり」

ルビー「さて、なんかのけ者にされてましたが…… 話を戻してやりませんか!? 魔法

少女」

あ、まだいたんだ。

イリヤ「えっと他を当たっ…」

ルビー「楽しいですよー魔法少女！ 羽エフェクトで空を飛んだり！ 必殺ビームで敵をなぎ倒したり！」

私の話を聞いて！

ルビー「恋の魔法でラブラブになったり！」

えっ？

ルビー「あ！ 今反応しましたね！ いるんですね！ 意中の殿方が!!」

イリヤ「い、いないじゃない！ そんなのいないよ！」

ルビー「ムキになるのがまた怪しいですね！ 相手は誰ですか!? ベタにクラスの男子とか!?」

イリヤ「ち、違うってば！ ってかなんでわたしステッキに攻められてるの!?!」

何この状況!?!

ルビー「ははーん、わかりましたよ。

さては…」

な、何!?!

ルビー「貴女がフォーリンラブなのは… さっきの

お兄さんですね！」

なっ…

イリヤ「違うって言ってるでしょこの… バカーっ！」

ガクン…

あ、あれ…：体が…？

ルビー「うふふ、想定以上にちよろかったですね」

何!? 何したの!?

ルビー「血液によるマスター認証、接触による使用の契約、そして起動のキーとなるオトメのラヴパワー！ 全て滞りなく頂戴致しました！」

な、なにそれ!?

ルビー「さあ… 最後の仕上げと行きましようか、貴女のお名前を教えてくださいまし」

イリヤ「イ…イリヤ… イリヤスファイル・フォン・アインツベルン！」

ルビー「マスター登録完了！ このまま多プリズムトランス元転身行っちゃいましょう！

コンパクトフルオープン！ 鏡界回廊最大展開！」

ルビー「新生カレイドルビー
プリズマイリヤ!!
爆誕！」

第8話 初陣

ルビー「新生カレイドルビー プリズマイリヤ!! 爆誕!」

イリヤ「なにこれ!? ホントに魔法少女なの!?

恥ずかしいし、なんかすぐくみつともない!」

おまけに外に出ちやってるし!

ルビー「いえいえキマってますよ! やはり魔法少女はローティーンがベストマッチ
ですね!

どこの年増魔法少女もどきとは大違いです!」

???「誰が年増だつて?」

だ、誰!?

ルビー「おや誰かと思えば凜さん、生きてたんですね」

振り向くとそこにはお兄ちゃんより少し年上くらいの女の人がいた。

凜「ええおかげ様でね… 本当に生きてるのが不思議なくらいだわ…」

な、何があったの…

凜「こつちへ来なさいルビー!」

誰があんたのマスターなのかみっちり教えてあげるわ！」

ルビー「わたしのマスターですか？

そんなの教えられるまでもありませんよ。

こちらにおわすイリヤさんこそがわたしの新しいマスターです！」

凜「はあ!? ちょっとあんた…?」

イリヤ「ち、違います！ 詐欺です！ 騙されたんです！」

望んでこうなつたわけじゃないし！

凜「あー、だいたい分かったわ… とりあえずそれ返してくれる？」

ろくでもないものだけどわたしには必要なのよ」

イリヤ「は、はあ… どうぞ」

良かった、これで丸く…

凜「…ん？」

あ、あれ!?

手が離れない!

ルビー「無駄ですよお二人さん。既にマスター情報は更新済みです。

本人の意思に関わらずわたしは許可しない限りマスター変更は不可能です！」

収まらなかつたー!?

凜「へえ… 随分な真似してくれるじゃない…

それなら今すぐマスター変更したくなるようにしてあげるわ…」

ルビー「相変わらずですね…

そんなにあの服が恋しいのですか？」

凜「恋しいわけあるか!!

あんなもの人に見られたら自殺ものよ!」

わたし今自殺ものの状況なのかな!?

ルビー「しようがないですね…

イリヤさん、このやろーと思いつつながらわたしを凜さんに向けて振ってください」

え? えーと…

このやろー?

凜「ぎやあああ!」

イリヤ「きやあああ!?! なんか出た!?!」

ルビー「イリヤさんの返答はこうです。

『ステッキはわたさねえ… 国へ帰る年増ツインテール』

言つてない! 言つてないよそんなこと!

凜「何すんだコラーツ!」

うわあ!? なんか撃ってきた!?

あ、あれ…?!

当たったのに何ともない…?!

ルビー「お忘れですか凜さん? カレイドルビーにはAランクの魔術障壁、物理保護、
治療促進^{リジエネレーション}、身体能力強化などが常にかかっています。

人間如きが敵うはずありません!」

ちよつと勝手に煽らないで!

凜「はあ… やれやれね…」

え?

ピカッ!

な、何も見えないよ!?

ルビー「爆発!? いえこれは…閃光弾! イリヤさん下がってください!」

な、何!?

凜「ごめん、少し眠っててね」

同時刻

地下室 レーベのラボ

少佐『ん？』

レーベ「どうした少佐？」

少佐『いえ、気のせいかもしれませんが外で爆発のような音が…』

マックス『そうか？ 何も聞こえなかつたぜ？』

レーベ「それにここに聞こえる程度の爆発ならセラさん当たりが呼びに来ると思うし、多分気のせいだよ」

再び場所は戻り…

凜「ほらイリヤ起きて、手加減したんだし怪我してないはずよ？」

イリヤ「あ…う…？」

うわ裸に戻ってる…

凜「とりあえず話をしましょう、家にも上げてもらえる？」

数分後…

イリヤの部屋

で、どうかセラやお兄ちゃんを誤魔化して部屋まで来れた…

凜「じゃあ説明と行きましようか。」

まずわたしは遠坂凜、魔術師よ、まあまあ魔法使いって思ってくれて良いわ」

イリヤ「まほーつかい…?」

いまいちよくわからない…

凜「まあ一般人に理解しろっていう方が無茶なのかもしれないけど…

これでも一応ロンドンの『時計塔』じゃ首席候補なんだから」

イリヤ「えーと時計塔ってのは…?」

まあ新しい単語が…

凜「魔術を研究する、いわば大学みたいなところよ、表向きは留学扱いで去年からそこに通っていたわけ。」

で、戻って来た理由だけ…」

なんでメガネ…

凜「結論から言うと私たちは時計塔からの要請でこれを回収しにきたの」

なんかタロットカードの様なものを差し出された。

イリヤ「アーチャー? 何も書いてないんじゃないよ?」

凜「そういうカードじゃないから!」

え？ 違うの？

凜「それはおもちゃじゃないの、極めて高度な魔術理論で作られたものよ。悪用すれば街ひとつ消し飛ばせるくらいだね。」

そんな危険物がこの街に眠っているのよ」

イリヤ「そっか、つまり…」

こういう事だよね？

イリヤ「凜さんは町に仕掛けられた爆弾を秘密裏に解体する闇の爆弾処理班みたいな感じなんだね！」

凜「いや、まあ… だいたいあってるわ。」

で、その爆弾を処理するのに生身じゃきついから、貸し出されたのがこのバカステツキってわけ。

本当ならわたしがやるはずなんだけどこのバカが言うこと聞かないから、代わりに戦って貰うわ。

覚悟しておくように！」

え…？

ええええええ!!?

翌日

学校に行く途中

イリヤ「ふあ… あふう…」

眠い、昨日あまり寝れなかったからなあ…

レーベ「眠たそうだね、ゲームでもしすぎた？」

イリヤ「ううん、ただあまり寝れなかっただけ…」

ああ…

せつかくお兄ちゃんがそばにいるのに会話すらきつい…

レーベ「そうなのか、まあ何かあったら僕に相談してね、力になるからさ」

イリヤ「うん！」

やっぱりお兄ちゃん頼りになるな

注) ここから先、時々三人称視点の文章が入ります、ご容赦ください。
数時間後…

校庭

凜「お、ちゃんと来たわね」

そりやあんな脅迫状出されたら…

凜「さて、じゃあ始めるわよ、準備は良い？」

イリヤ「う、うん！」

凜「カードの位置は既に特定してあるわ、校庭のほぼ中央、歪みはそこから観測されてる」

え、でも…

イリヤ「何も無いよ？」

凜「ここにはないわ、カードがあるのはこっちの世界じゃない、ルビー」

ルビー「はいはい、それじゃあ行きますよ！」

な、何!?

ルビー「半径2mで反射路形成！ 鏡界回廊一部反転します！」

イリヤ「な、何するの!？」

凜「カードがある世界に飛ぶのよ」

床の光がおさまるとさつきと同じ場所だが、雰囲気がまるで違っていた。

凜「鏡面界　そう呼ばれる世界にカードはあるの、詳しく説明してる暇はないわ！

来るわよ！」

何が!?

イリヤがそう思っていると、校庭からナニカが出現し、襲い掛かって来た。

イリヤ「何あれ!？」

凜「報告どおり実体化した！」

ズドン！

わわっ!?

凜「Anfang^ト！ 爆炎弾三連！」

凜が石のような物を投げると着弾と同時に爆発する。

だが…

凜「無傷か… やっぱ魔術は効かないか…」

凜も目くらましくらいにしか考えていなかった。

凜「じゃ後任せた！」

イリヤ「ええっ!?! 投げっぱなし!?!」

まさかの丸投げである。

だが敵は待つてくれない、すぐに二撃目がくる。

だがイリヤはそれを間一髪で交わす。

イリヤ「かすった! 今かすったよ!」

ルビー「接近戦は危険です! まず距離を取ってください!」

キヨリね! そうね取りましょうキヨリ!

イリヤ「キヨリイイイイ!!!」

そう叫びながら脱兎のごとく走るイリヤ。

凜曰く「逃げ足だけは最強」とのこと。

距離を取ったイリヤはルビーに言われたとおり、ステッキを横にふる。

すると斬撃の様なものが出現し、校庭の一部ごと敵を薙ぎ払う。

イリヤ「スゴッ!?! なにこれ!?!」

ルビー「いきなり大斬撃とはやりますね！」

敵はなお健在であったが無視出来ないダメージが入ったのも確かだろう。

凜「効いてるわよ！ 間髪入れずに次！」

イリヤ「たあ！」

イリヤ怒涛の連続射撃。

だが敵は機動力に物を言わせて躲す。

ルビー「砲撃タイプでは追いきれませんね、散弾に切り替えましょう」

散弾…つて前にお兄ちゃんが見ながら教えてくれたあれ？

ルビー「イメージ出来ますか？」

イリヤ「やって見る！ 特大の… 散弾！」

先程の斬撃よりもさらに広範囲に攻撃が及び、校庭は爆煙でさながら海のようになっていた。

イリヤ「や…やった？」

ルビー「イリヤさん！ フラグですそれ！」

凜「範囲を広げすぎよ！ 一発あたりの威力が落ちてるわ！」

反撃に気をつけ…っ！」

爆煙がはれ、見えてきたのは魔法陣の様なものを正面に展開した敵だった。

凜「宝具を使う気よ！ 逃げて！」

凜がそう叫ぶがイリヤは咄嗟の事で反応が出来ず、脱出のチャンスを逃す。そのため凜が一か八かで防壁を張る。

そして敵の宝具が発動されようとしたその時：

??? 「クラスカード『ランサー』 限定展開

刺し穿つ死棘の槍!!」

背後からやってきた増援? により、敵は消滅する。

??? 『『ランサー』 接続解除、対象撃破。

クラスカード『ライダー』 回収完了」

イリヤ「だ、だれ……?」

第8話 転校生

イリヤ side

イリヤ「だ、だれ…?」

??? 「オーホッホッホ！」

わっ!? 何?

凜「このバカ笑いは…」

??? 「まずは1枚、カードは頂きましたわ！」

な、なんかすっごいハデな人出てきたんだけど！

??? 「ここしかないというタイミングで如何にして必殺の一撃を叩き込むか。

そこが勝負のキーですわ。

だというのに相手の宝具に恐れをなして逃げ惑うなど笑止千万！

とんだ道化ですわね遠坂凜！」

凜「やかましい！」

って言うって凜さんが金髪の人をキックした。

そしてなんか喧嘩になっちゃったよ…

ルビー「成長しませんね、この人は」

ピシッ!

イリヤ「ル、ルビー! なんか地面が割れて……」

オマケに空もヒビ入っているし!

ルビー「ああ、カードを取り除いたので鏡面界が閉じようとしてるみたいですね。

凜さんルヴィアさん、さっさと脱出しますよ」

ルビーがああ言ってるけど2人とも某スーパー野菜人みたくなっている2人には届いていなさそう…

??? 「……サファイア」

サファイア「はい、マスター。半径6mで反射路形成、通常界へ戻ります」

帰り道：

凜 「つたくあのバカは…」

あの後金髪の人 ルヴィアさん達と別れて帰る途中、凜さんが愚痴を言ってきた。

凜 「カード回収任務を勝負と履き違えているわ」

イリヤ 「嵐みたいな人だったね… あの人って見方じゃないの？」

凜 「本来は那不是だったんだけど、今は対抗馬… ってどこかしら」

ライバルキャラって事だね…

ルビー 「結局あの子が誰なのか聞きそびれてしまいましたね、サファイアちゃんの新しいマスターさんですし、気になります」

イリヤ 「うーん…」

ルビー 「おや？ どうしましたイリヤさん？」

イリヤ 「いや… カンなんだけどこのパターンでいくとこれってさ…」

翌日

穂群原学園小等部5年1組

美遊「美遊・エーデルフェルトです」

大河「はい、皆仲良くしてあげてね」

うん、やっぱりこうなるよね」

ルビー「なるほど転校生ですか、何ともベタな展開ですね」

大河「席は窓際が一番後ろね、イリヤちゃんの後ろのそこ」

えっ!?

で、座ったはいいけど…

な、なんかめちやくちや見られてる!?

何このプレッシャーは!?

ルビー「メンチで負けては行けませんよイリヤさん!」

授業終了後…

ルビー「早速囲まれてますね〜 まあ、転校生の誰もが通る道でしょうか」
だね…

いろいろ聞きたかったんだけどこれじゃ無理だね…

サファイア「では私が代わりにお話を伺います」

イリヤ「わっ!？」

いつの間に私の肩の上には!？」

ルビー「あらあら、サファイアちゃんも来てたんですね〜」

ちよ、ちよつとみつかつちやうよ!

とりあえず窓際に!

ルビー「そういえば紹介がまだでしたね、こちら、わたしの新マスターのイリヤさん

です」

サファイア「サファイアと申します、姉がお世話になっております」

イリヤ「はあ、どうも…」

なんかシユールな絵面…

イリヤ「ステッキって2本あったんだね、知らなかったよ」

ルビー「ええ、私とサファイアちゃんは同時に造られた姉妹なんですよ。

魔力を無制限に供給し、マスターの空想を元に現実には奇跡を具現化させる、それが私たちカレイドステッキの機能です」

サファイア「先日までルヴィア様にお仕えしていたのですが故あって…」

イリヤ「乗り換えたのがあの子ってわけね」

ルビー「しかし美遊さんもものですね、初めての戦闘でいきなり宝具を使うなんて」

イリヤ「宝具？ なにそれ？」

ルビー「おっと、まだ説明していませんでしたね。

無事初戦も切り抜けられましたし、お話ししましょうか。

イリヤさん、以前凜さんから見せてもらったクラスカードを覚えていますか？」

イリヤ「うん、なんか危険なものなんでしょう？」

ルビー「はい、そのカードはなんの前触れもなく冬木市に出現しました。

異常な魔力の歪みを観測した協会は調査を開始、今から約2週間前の事です。

その間、協会は2枚のカードを回収し、分析しましたが…

製作者どころか用途や構造も不明、分かったことと言えばこのカードは実在した英雄の力を引き出せるらしい… ということのみです」

英雄…？

ルビー「神話や昔話に出てくるあれです。

偉業を成し遂げ、英雄と認められた者は死後、「英霊の座」と呼ばれる高次の場所に迎えられるます。

そうして英霊となったものはそれぞれが力の象徴たる武装を持っています、それが宝具です。

私たちはカードを介する事で英霊の座にアクセスし、その宝具の力を一瞬だけ具現化させる事が出来るんですよ。

どうも1枚に対し1人が対応しているようで… って大丈夫ですかイリヤさん!?

もう少し続きますよ!」

イリヤ「だ、大丈夫…!」

7、8割理解してるよ…

たぶん…

サファイア「では続けましょうか…」

クールだね…

サファイア「もうお気づきかも知れませんが昨夜戦った敵…

あれもカードから引き出された英霊の力…

いえ、英霊そのものと言って良いでしょう。

とはいえ本来の姿から変質している上、理性も無いようですが。

英霊はカードを包むように実体化しており、そのため英霊を倒さねばカードを回収出来ません。

アーチャーとランサーは協会から派遣された魔術師によって打倒されましたが…

イリヤ「が？ 何かあったの？」

サファイア「ライダーには魔術が全く聞かなかったのです、恐らく対魔力Bクラス以上…」

『魔術を無効化する』という概念的な守りを持っているようです」

ルビー「そこで白羽の矢が立ったのが私たちというわけです、私たちならば純粋な魔力攻撃が出来ますから」

サファイア「協会が感知したカードの反応は7つ、残りは4枚です。」

私たちも全力でサポートさせていただきますのでどうか…」

??? 「サファイア、あまり外に出ないで」

ひい!?

サファイア 「申し訳ございませんマスター、イリヤ様にご挨拶をと思ひまして」

美遊 「誰かに見られたら面倒、学校ではカバンの中にいて」

よし、なんか私空気になってるけど今なら！

イリヤ 「あ… あの…」

美遊 「……」

あ…

イリヤ 「なんか… 声かけづらい雰囲気？」

ルビー 「なかなか気難しい人のようですね、しばらく観察と行きますか？」

イリヤ 「それもそうだね、そうしよう！」

で、観察した結果…

放課後

公園

ルビー「イリヤさん、いつまでいじけてるんですか？」

イリヤ「別にいじけてないよ… ただ才能の壁つてのを見せつけられたっていうか

…」

わたしは今、公園でうずくまっていた。

お兄ちゃんはいない、今日は部活らしい。

でもあんなの絶対おかしいよ。

勉強だけじゃなく、運動ですら勝てないなんて…

リアル完璧超人だよ…

美遊「…何してるの？」

ルビー「おや美遊さん」

イリヤ「こ、これはお恥ずかしい所を… 美遊さんにあらせましては今お帰りです？」

美遊「……なんで敬語？」

え？ いや何となく：

ルビー「なに卑屈になってるんですかイリヤさん！

美遊さんは同じ魔法少女の仲間です！」

仲間……そっか。

美遊「あなたも、ステツキに巻き込まれてカード回収を？」

イリヤ「う、うん、成り行き上仕方なくっていうか、騙されて魔法少女にさせられた
というか……」

美遊「そう……それじゃあなたは どうして戦うの？」

ただ巻き込まれただけなんでしょ？

ならあなたには戦う責任も義務もない」

イリヤ「うーん、実を言うと…… こういうのにちよつと憧れてたんだ。

ホラ、これっていかにもアニメやゲームみたいな状況じゃない？

せつかくだから楽しんじゃおうかなーって……」

美遊「もういいよ」

……えっ？

美遊「その程度？ そんな理由で戦うの？」

え… な、何？

美遊「遊び半分で英霊を打倒できるとでも？

もうあなたは戦わなくていい、カードの回収は全部わたしがやる。

せめてわたしの邪魔だけはしないで」

数分後…

イリヤ宅前

イリヤ「なんで怒ったんだろう…？」

ルビー「わかりませんが… なんか地雷踏んだっぽいですね」

はあ、だいたい巻き込まれたっていうならあの子も一緒じゃない…

なんであんなこといわれなきや… ってあれ？

イリヤ「ただいまセラ、どうしたの？ 外に出て」

セラ「あ、おかえりなさいイリヤさん、ええとですね、あれを…」

？ というわけでセラが指さした方向を見る。

すると…

イリヤ「なっ!? 何この豪邸!? こんなうちの目の前に建ってたっけ!」

セラ「今朝から工事が始まったと思つたら… あつという間にお屋敷が出来上がつ

て…

昨日まで普通の民家が並んでいたはずなのに…」

イリヤ「いったいどんな人が住むの…」

美遊「あ…」

ん？

振り向くと美遊さんが立っていた、なんとというかその… 気まずい…

美遊さんもそれは同じだったのかさっさと目の前の豪邸に入つていった。

ん？ という事は…

イリヤ「この豪邸… 美遊さんの家…？」

美遊「まあ… そんな感じ…」

なんだかおかしなコトになってきたね…
しかし、ついさっき喧嘩別れしたばかりだというのに…
まあでも、今夜また会うだろうしね」

第10話 敗北と特訓、そしてさらなる武装開発

午前0時過ぎ…

三人称 side

冬木市某所

日付が変わり、カード回収第2回戦… のはずであったが…

イ・凜・美・ル「………（33—4）」

全員がボロボロであった。

鏡面界に突入したは良いものの、敵は待ち構えていたかのように要塞陣地のようなものを展開しており、攻撃は魔力反射平面によって無効化され、敵の攻撃はカレイドの魔法少女がもつ、ランクAの魔術障壁を軽々と突破したため、イリヤ達は退却を余儀なくされた。

ルヴィア「まるで要塞ですわ… 反則ですわよ！」

イリヤ「痛かったよ…」

レーベが聞いていようものなら敵を原子レベルで灰にしそうな呟きをするイリヤ。

ルビー「あれは現在のどの系統にも属さない呪文と魔法陣でした。

恐らく失われた神代の魔術と思われます」

凜「あの魔力反射平面も問題だわ、あれがある限りこっちの攻撃は無意味よ、幸い敵の攻撃も防御も座標固定型みただから魔法陣の上まで飛ばば戦えると思うけど…」

一応対抗策はあるようだが如何せん材料が足りない。
と思われたが：

イリヤ「あ、そっか、飛んじやえば良かったんだね」

イリヤがそう呟くと全員がイリヤの方を見る。

イリヤ「え、何？」

凜「ちよ、ちよつと！　なんでいきなり飛べるのよ!？」

ルビー「すごいですよイリヤさん！　高度な飛行をこんなにあっさりと！」

イリヤ「え？　そんなにすごいことなの、コレ？」

イリヤはいまいち凄さが分かっていないがこの飛行と言うものはそこまで簡単ではない、イリヤのような一般人がその場の思いつきでできるような事ではないのだ。

そのため、凜とルヴィアは即ツツコミを入れる、なぜ飛べるのかと。

それに対してイリヤは：

イリヤ「魔法少女って飛ぶものでしょ？」

さも当然のようにそう言う。

凜・ル「な、なんて頼もしい思い込み……!」
ルヴィア「くっ…… 負けてられませんわよ美遊!

あなたも今すぐ飛んでみせなさい!

ルヴィアは何を思ったのか美遊にも飛行をさせようとするが……

美遊「人は…… 飛べません」

ルヴィア「な、なんて夢のない子供……!」

そんな考えだから飛べないのですわ!

来なさい! 明日までに飛べるように特訓ですわ!

覚えていなさい遠坂凜!

ルヴィアはそう言いつつ、美遊の首根っこを掴んで帰っていった。

凜「なんでわたしのよ」

イリヤ「捨て台詞が好きだなだね……」

苦笑いをするイリヤ。

凜「やれやれ…… 今日ほこれでお開きね。

明日はちょうど学校休みだし、わかしても戦略練ってみるわ」

イリヤ「また明日かあ…… 勝てるのかな、アレに……」

凜「勝つよ! 何としても!!」

イリヤside

翌日

山

こんにちは皆！ イリヤだよ！

昨日の戦いを踏まえて、特訓するために毎度お馴染み山に来たよ。

で、来たは良いんだけど…

イリヤ「林の中で特訓とか… 魔法少女にしては地味だね」

ルビー「舞台裏なんてそんなものですよ、日々の地道な努力がいつか実を結ぶのです

！」

そっか、そうだよね！

じゃあ頑張る！

一方、出番が無い本s sの主人公(笑) 達は…

レーベ side

同時刻

冬木市 レーベのラゴ

レ・マ 「出番ない言うなああああああ！」

毎回ちよくちよく出てるでしょ!?

少佐 『恐れながら大佐殿、前回はあとがきに出たくらいでは…?』

いやまあそうなんだけどね…

』

まあいいや、僕が出ない分イリヤが活躍してるでしょう。

そんなことより武装開発つと。

少佐『今回は何を作るおつもりで？』

これ。

少佐『これは… グレネードランチャーのように見えますが…』

だいたいあつてるよ、これはリボルビング・ランチャー、ビームマグナムのアンダーバレルに付ける専用装備さ。

マックス『ほう？ で弾丸は？ また同志の十八番、光子榴弾か？』

うん、それも使うけどもうひとつ。

少佐『これは… 徹甲榴弾ですか？』

そう、瞬^M光^G式徹甲榴^A弾^Pっていうらしい、なんだかんだいって実体弾作るのは初めてだね。

なんでも装甲を高熱で融解させた後に炸裂する徹甲榴弾らしいよ。

それと同時進行でこれも作る。

マックス『レールガンキタ——（。▽。）——!!』

少佐『落ち着いて下さい！ しかし大佐殿、レールガンは専門外では？』

いやまあ、SV—D開発が難航してきたから息抜きがてら良いかなって。

少佐『そう言えばあれも大佐殿の専門外でしたね』

まあ、そうなんだけどね、でもあれは絶対欲しくなるから今作っておかないと間に合わない。

それに知らない事に挑戦するのも面白いって前に母さんが言ってたし。

マックス『流石母さん！　　というわけで同志！　　早速レールガン作ろうぜ！』

お、珍しく乗り気だね、イリヤ関連以外はそんな風にならないのに。

よし、じゃあ制作開始！

場所は戻って：

イリヤside

数十分後…

山

ルビー「そこそこ上手に飛べるようになってきましたね」
だね。

あ、そうだ。

イリヤ「凜さんからこれ預かってきたんだけど試しに使って良い？」

ルビー「あらくラスカードですか、良いですよ」

アーチャー「って言うくらいだから弓だよね？」

どんな必殺の武器が…

イリヤ「インク限定展開！」

ほんとに出た！

イリヤ「これがあれば勝てちゃうんじゃない!？」

よし、早速試し射ちを… ってあれ？

矢は？」

ルビー「ありませんよ」

えええ弓だけ!？」

イリヤ「全然意味無いよコレ！」

ルビー「そう言えば凜さんが試し射ちした時も矢がなく、手近にあった黒剣を矢代わりに使ってましたね…」

あ、戻った。

ルビー「時間切れです」

はあ… 地道に特訓するしかないね…

ルビー「頑張りましょう！ 美遊さんも今頃は特訓しているはずですよ？」

美遊さんか… どんな特訓してるんだろ？

では噂の美遊さんと言いますと…

三人称 s i d e

同時刻

冬木市 上空

冬木市の上空を飛行中のヘリコプターの中で美遊とルヴィアが揉めていた。

美遊「無理です」

美遊は半ばハイライトが消えた目をしながらそう言う。

ルヴィア「美遊、あなたが飛べないのはその頭が固いからですわ。

最初から無理と決めつけては何もなりません！」

美遊「ですが……」

サファイア「おやめくださいルヴィア様、パラシュートなしのスカイダイビングなど

自殺行為です」

そう、これが揉めている理由だ。

ルヴィアは美遊に身体が浮く感覚を掴ませようと、そしてあわよくばそのまま飛んでもらおうとこの様な暴挙に出たのだ。

曰く、魔法少女の力は空想の力、故に常識に捕らわれては行けない、と。

どこぞの緑髪の巫女のようなことを言っていた。

サファイア「付き合う必要ありません美遊様、拾って頂いた恩があるとはいえ、これは度が過ぎています」

ルヴィア「さあ！ 1歩を踏み出しなさい！ あなたなら必ず飛べます！
為せば成るのですわ！」

美遊「いえ、やはりどう考えても無理でs…」

美遊がすべて言い終わる前に、ルヴィアは美遊をヘリコプターから突き落とす。ルヴィア曰く、獅子は千尋の谷にわが子突き落とすのと同じらしい。

イリヤside

場所変わらず

ん？

何か降ってき…

イリヤ「たああああ!!？」

「いったい何!？」

サファイア「全魔力を物理保護に変換しました、お怪我はありませんか？」

美遊「何とか…」

イリヤ「なんで美遊さんが空から…」

必殺技？

それとも「親方、空から女の子が!？」ってやつかな？

美遊「飛んでる…」

サファイア「はい、ごく自然に飛んでおられます。

美遊様、ここはやはり…」

美遊「うん…昨日の今日で言えたことじゃ無いけど…

その…飛び方を教えて欲しい…」

えっ!？」

教えてって言われても…

サファイア「イリヤ様は『魔法少女は飛ぶもの』とおっしゃいました、そのイメージ

の元がおりなのでは？」

イリヤ「元… あー… それなら…」

十数分後…

冬木市 イリヤ宅

美遊 「こ、これ…?」

美遊さんがわたしの見せた「マジカル☆ブシドームサシ」を見てすごい顔してる…

イリヤ 「うん、わたしの魔法少女のイメージの大元かな…?」

恥ずかしながら…

美遊 「航空力学はおろか、重力…」

はい!?

なんか難しい事言い始めた!?

サファイア「美遊様もこれを見れば飛べるのでしょうか？」

美遊「ううん、たぶん無理… 非現実過ぎて飛行のイメージに繋がらない…」

アニメに現実を求めても…

見せておいてなんだけど…

ルビー「はあ… 美遊さんは頭が固すぎです！ そんな感じでは魔力は務まりませんよ？」

イリヤさんのように理屈などをすつ飛ばして結果だけイメージするくらいの能天気な思考の方が向いています！」

なんかすぐく馬鹿にされてる!?

これでも学校の成績はかなり良いんだからね！

(レーベが勉強に付き合っているのが主な要因)

ルビー「そうですね、美遊さんにはこの言葉を贈りましょう。」

『人が空想できることすべては起こり得る魔法事象』

わたしたちの創造主たる人の言葉です」

それを聞いてさらに首を傾げる美遊さん。

イリヤ「まあ、つまりあれでしょ？ 『考えるな、空想しろ！』」

美遊「……あまり参考にならなかつたけど、考え方は分かつた気がする」

そう言つて立ち上がる美遊さん、あれ？ 帰るの？

美遊「また… 今夜」

ルビー「行つちやいましたね」

また今夜… か

あなたは戦うなつて言われた昨日よりは前身かな？

第11話 出撃

数時間後…

三人称 side

午前0時前

イリヤ宅

イリヤ「よし… 行くよルビー！」

ルビー「分かりましたよイリヤさん！」

午前0時まであと十数分といったこの時間に、イリヤは2枚目のカードの英霊とのリターンマツチをするべく、家を出た。

だが…

レーベ「今のは…」

自身の兄にそれを見られていたとは知らずに…

レールベ side

数分前

レールベ宅 玄関付近

ああ… 畜生、レールガン作成にいい熱中してしまった…

少佐『ですがリボルビング・ランチャーは既に完成し、レールガンも大部分が出来たのですから五分五分では？』

いやまあ、それは良いんだよ、問題はこの時間帯まで起きていたこととSV—D開発がまったくと進まなかった事だよ…

だから今夜はもう少しやる。

確か冷蔵庫にコーヒーが…

少佐『……おや？』

ん？

どうした少佐？

少佐『玄関で扉の開閉音を感知、明らかに人が出入りした時のものです』

マックス『おかしいな、鍵はセラがかけたはずなのに…』

同志、行ってみるか？』

当然、泥棒とかだったらこいつで仕留める。

そう言つて白衣のポケットにあるルガーP08を取り出し安全装置を解除する。

少佐『…人はいないようですね、どちらかというと出ていった感じですね』

何!?

何か持っていかれてたら面倒だ！

そう言つて僕はすぐさま玄関から外に出て、左右を見渡す。

すると角を曲がる白い何か、目に映つた。

レーベ「今のは…」

まさか…

少佐『間違はなくイリヤスフィール嬢でしょうな…』

マックス『そんな… イリヤが不良に…』

まだ決まったわけじゃないよ、それに君にはイリヤが自分からそんな事する子に見える

るのかい？

マックス『いや、見えない』

だろ？

十中八九何かに巻き込まれたと考えるのが自然だ。

しかし何に… ツ！ まさか!?

少佐！ イリヤを今すぐ魔術面からスキャンをかける！

少佐『分かりました！

…!?! た、大佐殿！ イリヤスフィール嬢の持ち物らしき物から魔力反応があり

ます!』

やっばりか！

マックス『ど、同志、まさかイリヤが例のXデーに巻き込まれたのか!?!』

恐らくな、素質で言えばイリヤもある。

母さんが封印したとはいえ、な。

少佐『しかしいつから…』

今はそんな事どうでもいい！

少佐！ 今すぐ拳銃のセットとビット母機、装甲服を転送してくれ。

マックスはイリヤの現在位置ならびに目的地を特定しろ！

少佐『わ、分かりました！ 装甲服ならびに武装を転送します』

マックス『了解、衛星で追跡する』

少佐の声のあと、僕の服が戦闘用にクラインフィールドと超重力電磁防壁を発生させる服に切り替わる、ちなみに白衣だ、左腕にZ旗を模した腕章がついた、ちなみにこれがミラーリングシステムになっている。

そして背中にはビット母機であるリュックサック、加えてポケットには僕の初レザガンである、ルガーP08とワルサーP38が予備弾倉も込で入っている。

これで準備は完了だ。

マックス『同志、イリヤはどうやら川に向かっているみたいだ』

了解、じゃあ出撃！

「了解！」

(ちなみに今の芸当は超兵器の能力によるものです。)

マックスはソビエツキー・ソユーズのレーダーを使い、少佐はヴォルケンクラツツアーの空間操作能力を使い、転送したのです (By作者)

数分後…

河川敷

マックス、誰もいないのだから…？

マックス『馬鹿な!? 録画を確認してみる… 同志、どうやらイリヤはどこか別次

元へ飛んだらしい』

別次元… 確定だな、Xデーは既に来ていた。

マックス、イリヤがいる次元を特定しろ。

マックス『任せろ!』

少佐、僕はヴォルケンクラッツァーの能力でそこまでの道を作る、少佐はいつでもこの次元から武装を転送できるように、ネットワークを調整してくれ。

少佐『承知致しました』

ふう、よし!

レーベ「限定武装、ヴォルケンクラッツァー」

マックス『特定完了、データを送るぜ?』

分かった。

……確認した、ルート作成開始！

三人称 side

ほぼ同時刻

鏡面界

凛「ジャンプ接界完了！ 一気に片をつけるわよ！」

ルヴィア「2度目の負けは許しませんわよ！」

イ・美「了解！」

凛とルヴィアの号令の後、イリヤと美遊は散開するり

敵は昨日と同様に上空に展開していた。

そして魔法陣も増えていた、相当警戒されているようだ。

イリヤ「(そういえば美遊さん、飛べるようになったのかな?)」

サファイア「いけますか美遊様？」

美遊「大丈夫」

そう言った後、美遊は空に向かい垂直に飛び： いや跳び出した。

それを見て驚くイリヤ。

直後、まだ地上にいたイリヤに敵の攻撃が殺到する。

イリヤ「あぶなっ：」

ルビー「イリヤさん、魔法陣の上まで飛んでください！」

そこなら攻撃は届きません！」

ルビーの声のあと、間一髪攻撃を躲したイリヤが飛び上がり、あつという間に魔法陣の上まで飛ぶ。

ルビー「さあさあ！ 敵勢力を排除して、制空権を我がものとするのです！」

空に上がると同時にテンションも上がったルビーからそう言われるイリヤ。

もちろん敵の排除が目的なので、凜が立てた作戦通りに攻撃を行う。

凜が立てた作戦とは、小回りの効くイリヤが陽動と攪乱を、突破力のある美遊が本命

の攻撃をそれぞれ担当する。

そして上空へ飛んだらとにかく斉射し、挟撃を維持しながらイリヤに敵の意識を向けさせ、そのすきに美遊が接敵距離クロスレンジに飛び込み、一撃必殺する、というものだった。

そしてイリヤはそれに従い：

イリヤ「中くらいの： 散弾!!」

イリヤが形成した弾幕に対し、敵は防壁を展開して凌ぐ。

だが結果的に足を止める形になってしまったため：

ルヴィア「美遊！ 今ですわ！」

美遊「『ランサー』 限定インク：」

背後からやってくる美遊の攻撃を避け切る事など出来るはずが無かった。

はずがないのだが：

美遊「消えた：？」

美遊がカードを使う前に、敵はまるで蜃気楼のように姿を消した。

それに驚いた美遊は一瞬行動を止めてしまった。

それがまずかった。

直後、美遊の背中に衝撃が走り、美遊は地面に叩きつけられてしまう。

イリヤ「美遊さん!?!」

ただ叩きつけられただけならまだ良かったが、サファイアの物理保護が間に合わず、ほぼダイレクトにダメージを受け、なおかつ足を怪我したため、素早い行動が取れずいた。

その傷の回復を待ってくれる敵ではなく、魔法陣のすべての照準が美遊に向けられ、発射される。

美遊「逃げられない……！」

だが……

イリヤ「うひゃー、ギリギリだったね」

間一髪イリヤが美遊を抱きかかえて移動したため、攻撃が当たることは無かった。

（なお美遊が心配で橋の下から出てきたルヴィアが代わりに砲撃に晒されていたのは完全な余談である）

イリヤ「美遊さん、大丈夫？」

美遊「……問題ない、怪我はすぐ治る。」

離して、もう大丈夫」

イリヤ「う、うん」

イリヤが美遊を離す。

ルビー「いやはやしかし参りましたね、さすが神代の魔女っ子？　と言いますか。」

転移魔術まで使えるなんて反則ですよ」

そう、先程美遊の目の前から消えたのはこれが原因だ。

美遊「大丈夫、手はある」

美遊はイリヤに新しい作戦を伝え、再び散開する。

凛「ちよつと： まだ同じ策を続ける気!!？」

ルヴィア「もうその策は通用しません！ 一時撤退ですわ！」

凛とルヴィアが撤退の指示を出す、2人は構わず敵に攻撃を仕掛ける。

イリヤ「(転移で逃げられるのならどこに転移しても当たるような、弾幕を張る!!)」

特大の： 散弾!!」

イリヤは最大出力の散弾を、敵ではなく、下方に展開されてある反射平面に叩きつける。

それにより、反射平面より上には死角が無くなる、しかしダメージは与えられない。

だが敵の動きは先程の美遊と同じく、一瞬だけ止まる。

そしてそのすきに：

美遊「弾速最大： 狙射!!」

美遊の放った魔力砲が今度は敵の方を地面に叩き落とす。

イリヤ「やった？」

ルビー「イリヤさんそれフラグです！」
ルビーの懸念通り、敵はまだ生きていた。

だが…

凜「Anfang! ト 轟風弾5連！」

ルヴィア「Zeichen! サ 爆炎弾7連！」

凜・ル「ローターシュトゥルム 炎色の荒嵐!!!」

凜とルヴィアが生み出された巨大な爆発が敵を飲み込む。

それと同時に、空を覆っていた魔法陣が残らず消滅する。

凜「ふう… なんとかなつたみたいね…」

ルヴィア「だいぶ予定は狂いましたが… 決着ですわね…

ですが、あなた5連つてなんですよ!?! 勝負所でケチつてんじゃねーですわ!」

凜「う、うるさい! 成金のあんたとは違うのよ」

イリヤ「あはは…」

美遊「……」

凜とルヴィアが喧嘩を始めると、イリヤと美遊が降りてきた。

そして美遊はカードを回収しようと辺りを見渡した時…

美遊「ツ!!?」

美遊が真っ先に気が付き、遅れて残りの3人も気づく。

ルヴィア「なっ!?!」

凜「まずい! 空間ごと焼き払う気よ!」

敵はまだ生きていた、そして切り札とも言える攻撃をしようとしていた。
まさに絶対絶命。

その時…

???「全員伏せろ!」

鏡面界に5人目の声が響いた。

第12話 人類最強対人類最強

レイベ side

数分前

河川敷

レーベ 「ルート作成完了」

少佐、そっちは？

少佐 『こちらでも完了です、いつでも武装を転送できます』

了解、では諸君、行くぞ！

マ・少 「了解！」

鏡面界

ジャンプ完了だ。

お、イリヤいた… って何あの格好、コスプレかな？

マックス『コスプレイリヤキター（。▽。）—！』

レ・少「喜ぶな—！」

マックス『なんでさ！ 似合ってるじゃん！』

それは認める。

少佐『認めるのですが… ってた、大佐殿！ あ、あれを！』

え、何？

って何だあれ!?

少佐『超高出力の魔力砲と推察されます！ 一刻も早くイリヤスフィール嬢達を連れ

て避難を！』

今からじゃ間に合わない！

迎撃する！ ミラーリングシステムの準備を！

少佐『了解！』

レーベ「全員伏せろ！」

僕がそう言うのと、凛ツインテの人とルヴィア金髪の人はすぐに伏せた。

イリヤはなんかびっくりして固まっていたが、美遊黒髪の子がイリヤを伏せさせてくれたから、どうにかなりそう。

マックス、今更だけどあれはミラーリングシステムでどうにかなりそう？

マックス『いけると思うぜ、ミラーリングシステムは最近強化及び対魔術を組み込んだばかりだから』

了解！ じゃあいくよ！

レーベ「次元空間曲率変異システム、展開！」

すると、僕を中心にして八角形を2つ作るように、計16個のホールが出来上がる。ふむ、設計通りだ、あとは正常に作動してくれば良いのだが…

少佐『高エネルギーを感知！ 来ます！』

かかってこい！ 相手になってやる！

直後、少佐の予告通りに敵は魔力砲を放つ。

マックス『うわあ… この規模だと奴さん、この空間ごと焼き払う気だったんだな…』

なにそれこわい。

まあ…

レーベ「イリヤがいる限り、させないけどね！」

だが、放たれた魔力砲は、イリヤ達に命中する前に、僕が展開したミラーリングシステムの16個のホールに吸い込まれる。

少佐『ミラーリングシステム、正常に作動、反射のため、威力のカットと魔力砲の解析を始めます』

分かった、でも多分必要ないよ？

少佐『はい？ どういう事ですか？』

だって…

美遊「今なら！」

美遊が飛び出して、ランサーのカードを取り出し、サファイアにかざす。するとサファイアは赤色の槍に姿を変える。

美遊「(魔力砲を撃っている間なら動けない!)」

美遊はそう思い、槍を構え：

美遊「刺し穿つ：死棘の槍！」

そのまま突き出す。

そしてその槍は動けない敵の心臓を貫く。

直後、敵は消滅し、それと同時に魔力砲は魔法陣ごと消え去る。

美遊「ふう： クラスカード『キヤスター』、回収完了」

サファイア「お見事です美遊様」

美遊「うん、あの人にお礼言わなきゃだね」

美遊「何者何でしょうね、彼：」

レベ side

同時刻

ね？

少佐『なるほど、大佐殿はあくまですきを作っただけと…』
まあ、無理だったら反射してケリをつけても良かったけどね。

ミラーリングシステム展開解除、エネルギーを放出開始。

少佐『了解、静音放出します』

はあ… とりあえず状況終了だな。

マックス『お疲れだ同志』

お互い様にな。

??? 「お、お兄ちゃん…？」

ん？

レーベ「やあ、イリヤ」

イリヤ side

な、なんでお兄ちゃんが…

しかもあのよく分からない穴何!?

オマケにお兄ちゃんにこの格好見られちゃったよ…

ルビー「とりあえずお話してみては？」

イリヤ「う、うん…」

怒られるんだろな…

イリヤ「お、お兄ちゃん…？」

レーベ「やあ、イリヤ」

そう言ってお兄ちゃんが近づいてきた。
てつきり打たれると思ったんだけど…

ポン

あ、あれ…？

レーベ「怪我とかない？ どこか痛いところとか…」

打たれるんじゃないかと頭を撫でられた。

なんで…？

イリヤ「怒ら… ないの…？」

レーベ「なんのために怒るか、だよ。」

結局のところ、親とかが怒るのはその人が心配だからだよ。

まあ、自己満足のために怒るクズもいるけどね。

僕はイリヤがただ心配なだけだからね、怒る必要はないかなって思ったただだよ。

それによくよく考えたら僕がここにいる時点で共犯だしね」

お兄ちゃん…

ルビー「（良いお兄さんですね）」

うん！

レーベ「さて、セラさんにバレル前に帰ろうk…」
ドオン！

レ・イ・美「!!？」
「」

レーベ side

何だあれ!?

マックス『マジかよ… 同志！ あれはさっきのやつと同じく敵だ！ それもとびき

り強い!』

何!?

ええい、一体片付けたばかりだと言うのに…

イリヤとさっきの黒髪の子はなんかツインテの人と金髪の人の人が斬られた事で放
心状態だし…

仕方ない、少佐、MG42を転送してくれ！

少佐『分かりました！』

少佐からレーザー機関銃 グロスフスMG42（光子榴弾グレラン付き）を受け取り、
敵に向けて構える、能力はとりあえずシユトウルムヴェイントにしておいた。

三人称 side

レーベ「撃ち方始め！」

レーベは速力をシュトウルムヴィントで強化しつつ、MG42を発射する。

嘗て『ヒトラーの電動ノコギリ』と呼ばれたその機関銃は、パルスレーザー機関銃となつて現代に蘇り、その過剰ともいえる連射能力は衰えること無く、敵に向けてレーザーの弾幕を形成する。

しかし…

レーベ「バカな!? 効いてない!？」

少佐『そんな… あんな時代遅れの鎧では防げるはずもないのに…

ん? 大佐殿! 目標の周囲に何かが!』

マックス『まさか… 超高密度な魔力の霧!』

だとしたら同志! あれをMGで貫くのは無理だ!』

MGのレーザーを防いだものの正体をマックスは突き止め、レーベに指示を出す。

レーベ「聞いたな少佐」

レーベが少佐にそう言いつつ、MGを放り投げる。

MGは地面に落ちる前に少佐が転送を駆使し、回収する。

少佐『もちろんです、大佐殿! こちらを!』

代わりに別の武器が転送される。

恐らく単一火力が一番高いのはこいつだろう。

そしてそれを構え：

レ・マ・少 「二ビームマグナムなら！」

容赦なく引き金を絞る。

放たれた光線は敵の魔力壁を減衰しながら突破し、敵のバイザーに命中する。

少佐 『多少威力は衰えてはいますが間違いない効いています！』

マックス 『このまま押し切れ！』

少佐とマックスの言葉を聞いたレーベは次々発射する。

少しずつではあるが、ダメージを与えているようだった。

イリヤ side

凜さんやルヴィアさんが目を覚ましたから、私たちはお兄ちゃんが戦っているのを見

て呆然としていた。

美遊「すごい…」

隣で美遊さんが驚いてる。

ルビー「決して驚かなさそう人だと思っていました…」

無理もないよ、だってお兄ちゃん、私たちみたいに転身もせずに戦っていて、なおかつ押してるもん…

凜「一体なんなのよ、あのお化け銃は…」

ルヴィア「ビームマグナムと言うらしいですわね…」

サファイア「明らかに魔術の類ではありません、ですが今の科学技術で作れるものでもありません」

じゃあなんなんだろう…

レーベ side

レーベ「ビームマグナムをこれだけくらっておいてまだ立つてられるのか…」

もう軽く20発は直撃させるといふのに…

マックス『タフだな… どうする？ 多分例の徹甲榴弾は霧に阻まれるぜ？』

かといってこつちにはこれを上回る単一火力は無い、負けてるわけじゃないから押し切る！

少佐、次のエネルギーパツクを。

少佐『転送します！』

少佐から送られてきた実に6個目のエネルギーパツクをビームマグナムに取り付け、砲撃を再開する。

マックス『うん？ 動きが止まった？』

なんだ、さつきまでは斬撃とか飛ばしてきたのに…

ま、当たらんかったがな。

だが、なんで…

まさか！

少佐『目標に高エネルギー反応！ 狙いはイリヤスフィール嬢です！』

何！

少佐！ マックス！ 全ビットを防御に回せ！

マ・少「了解！」

そう言いつつ僕もビットを展開、少佐やマックスのと合わせて、計6層の六角形のバリアが出来上がる。

そして…

??? 「約束された勝利の剣」

何もかもを破壊するかのような攻撃が放たれる、狙いは少佐の言う通りイリヤ達だった。

6層の防壁、普通なら突破は不可能だ。

だが…

パリンパリンパリン！

少佐『馬鹿な…』

戦車砲を難なく防ぐ防壁が、まるで薄いガラスの様に次々砕けていく。

マックス『同志！ 防ぐのは無理だ！ 避ける！』

嫌だね、僕が避けたらイリヤが怪我する。

それにまだやりようはある！

僕は僕の直轄しているビットの盾を右に少し傾け、同時に白衣の防壁も最大出力で展開する。

そして…

ドォーン！

敵の攻撃は僕らの斜め後方で爆発する。

上手くいったようだ。

マックス『なるほど、受け切れないなら逸らすまで、か…

考えたな…』

だろう…？

レーベはそう言うと糸が切れた人形の様に倒れる。

少佐『大佐殿!』

マックス『同志!』

イリヤ『お兄ちゃん!?!』

第13話 万甲を貫通する機光の槍

三人称 side

敵の宝具を何とか軌道をずらすことに成功したレーベだったが…

マックス『同志!? くそ！ 少佐！ 何とかならんのか!?!』

その際、軌道改変の要因になったレーベは超重力電磁防壁のキャパシテイを上回るエネルギーをその身に受け、意識不明だった。

少佐『今ハボクツクを限定武装させました！

傷はいずれ癒えるはずです！ しかし…』

ハボクツクの限定武装^{アームド}の能力は『継続回復』であり、一定のペースで傷を回復してくれるのだ。

マックス『それまでやつが待つてくれるわけないか…』

だが敵がはいいそうですか、と待つてくれるはずがない。

迎撃しようにも美遊は放心状態になっていた。

無理もない、レーベがビットを使い、威力を減衰させたにも関わらず、地面は裂け、凍達が隠れていた橋は真つ二つに割られていた。

その事に衝撃を受けているのだ。

凜とルヴィアも美遊と同じく固まっております、イリヤは…

イリヤ「お兄ちゃん…?」

いや… いやだよ… ねえ、目を開けてよ…」

自身の兄が倒されたことにより、完全に戦意を喪失していた。

マックス『ええい！ どうすんだこれ!? イリヤ達は固まってるし、同志は起きないし!』

少佐『とにかく、生きているビットで防壁を張るしかありません！

…ん?』

マックス『? どうした少佐?』

少佐『おかしいです、大佐殿の意識の存在が確認出来ません!』

マックス『はあ!? 意識がないならまだしも存在が確認出来ないって… 何がどうなってるんだよ!』

少佐『(前にもこんなことがあったはず… まさかとは思いますが姉さんが?)』

レールベ side

同時刻

レーベ「あ… ああ… ここは？」

僕が目覚ますと見慣れた光景、少佐の作成した空間が広がっていた。

だがそこに少佐やマックスはおらず、中央のテーブルには…

??? 「久しぶりね、パパ」

僕が初めて超兵器の能力を使った日に会った、僕をパパと呼ぶ銀髪の少女が座っていた。

レーベ「そうだね、でも悪いけど今はそんな事に構っている余裕は無いんだ、早く意識を戻してくれないか…」

超兵器グロース・シュトラール？」

グロース「ありや、バレてた？」

レーベ「パパって言葉が設計者を意味するなら、僕が設計・開発を任された兵器の中で唯一自我を持ちそうなのが君くらいだったからね」

超兵器、本当に謎が多い、まさかとは思ったが意識を持っていたとはね…

グロース「やつぱりパパには隠し通せるわけないか、まあいいけど。

あと私の事はシロって呼んでね」

良いのかよ… まあいい、そんな事より今はあの敵を倒すことが先決だ。

シロが僕をここに呼び出したって事は現状を打開する何かがあるのだろう。

レーベ「分かったよシロ。」

それで、君はこの非常時に僕を呼び出して、一体何がしたいんだい？」

シロ「そうね、私が聞きたいのは逆になんでそんな非常時になつてることかな？

パパは超兵器の力を行使できるんでしょ？」

レーベ「出来るけどそれが？ 圧倒的な防御力を誇る超兵器はないよ？」

あつたら苦労しないよ……

シロ「はあ…… 違うよパパ、私が言いたいのはなんで超兵器の能力を攻撃に使わないの？

今パパ達が使っている継続回復や武器転送なんて超兵器機関の副産物よ？」

超兵器の本質は特殊な能力じゃなく『破壊』、この2文字に尽きるわ、なのにパパは超兵器を攻撃に使わな……

まさかとは思うけどやり方知らない？」

シロは僕にそう聞いてくる。

レーベ「知らないね。」

あるの？ 超兵器を攻撃に使える方法が？」

シロ「(あの子が伝えてなかったのね、心配性なこと) うん、あるよ、でもパパが知らないんじゃないね、私が一緒に戦ってあげる」

そう言いつつ立ち上がり、僕に近づいてきた。

シロ「行きましよ、この世界の超兵器の指揮官たるパパをこんな目に合わせた奴に、引導を渡しに」

シロはそう言つて僕を抱きしめる。

レーベ「う… あ…」

またこれかよ、何回こうやって目覚めればいいんだよ…

イリヤ「お兄ちゃん！」

おっと。

僕はイリヤが抱きついて来たので受け止める。

イリヤ「大丈夫…なの…？」

レーベ「うん、そつちこそ怪我はない？」

もしこれで怪我でもされてたら僕の苦勞が無駄になるしね…

イリヤ「うん！　大丈夫！　ありがとうお兄ちゃん」

なら良い…

少佐『大佐殿！　今までどちらに!?!』

勝てるカードを取りに行つてた。

マックス『ほう？　で、そのカードつのは…』

シロ『へえー、なかなか居心地いいね、ここ』

マックス『はあ!?!　誰だお前!?!』

シロ『そういうのつてまず自分から名乗るものじゃないの？』

まあ、それは置いといて…

パパ、動ける？』

うん、どうやら少佐がハボクックで治療してくれていたようだ。

動けるよ。

シロ『分かった、じゃあパパ、行くよ!』

了解!

つとその前に:

レーベ「イリヤ、下がってて、ちよつと行ってくる」

イリヤ「え!? だ、ダメだよ! 勝てっこないよ!」

イリヤが涙目でそう言ってくる。

たしかに逃げるのが最善の選択肢なのかも知れない。

だが:

レーベ「大丈夫、勝算はあるよ」

イリヤをこんな目に合わせたあの騎士様に引導を渡してやる!

マックス『殺ってやるぜ!』

少佐『さあ、第2ラウンドです!』

シロ『行くよ。パパ! さっき教えたからやり方は分かるよね!』

もちろん!

レーベ「インストロ夢幻武装!ドグロース・シュトラール!」

僕がそう言うのと、アームド限定武装とは比べ物にならないくらい膨大な情報が頭に流れ込んでくる。

敵確認 解析完了

クラス セイバー

真名 アルトリア・ペンドラゴン

宝具 約束エされた勝利カの剣リ

さっきの攻撃の正体はこれだな、対抗戦術を作成開始

現有戦力での撃破… 可能

よし！

少佐、こちらの損害は？

少佐『大佐殿が敵の攻撃を弾く時に使った6機が大破、修理は不能と思われます。

加えてビームマグナムが蒸発しました』

なかなか酷いな…

まあいい、少佐、ビットは予備を投入、36機を少佐の指揮下に回す、僕には6機を

回してくれ。

少佐『了解です、手持ちの武器はどうしますか？』

これで行く。

僕は白衣のポケットにしまつてあつたルガーP08とワルサーP38を取り出す。

少佐『正気ですか!? ビームマグナムすら減衰してあのバイザーを破壊するのがやつ

とでしたよ！」

十分正気だよ、まあ見ててよ。

シロ、照準補正よろしく。

シロ『あいあいさー！』

三人称 side

レーベ「ビット6機、照準」

レーベがそう言うのとビットはレーベの前で六角形を作るように展開する。

普通ならビット程度の火力では敵の魔力の霧を突破することは出来ないが：

レーベ「βレーザー、γレーザー、発射！」

ビットから飛び出したのはこれまでとは桁違いの出力を誇るレーザーだった。

6機中3機からは菱形を半分にしたような形を描く3本のレーザーが、残りの3機からは8本のレーザーが放射状に発射され、33本が敵に殺到する。

そして：

ビューン！

魔力の霧をもとめせず、全てのレーザーが敵に突き刺さる。

美遊「す、すごい！」

離れたところでそれを見ていた美遊はそう呟く。

凜「あの出力：… もはや魔術の域ではないわね…」

サファイア「はい、未知の科学技術と思われれます」

その会話の間も、戦闘は続く。

レーベはビットで敵を攻撃する。

レーベ「沈め！」

レーベが撃った拳銃のレーザーは誘導荷電粒子砲となって敵に襲いかかる。

しかしそれは敵の魔力の霧によって阻まれる。

だが失敗では無かった。

ビューン！

直後、敵の背後から12門のβレーザーが突き刺さる。

少佐麾下のビット12機である。

少佐『まだ倒れませんか…』

敵もお返しとばかりに斬撃を飛ばすが、装甲白衣の強化された超重力電磁防壁で難なく弾かれる。

マックス『すげえ…』

シロ『ホントはこんなに強くはないんだけど…』

さすがパパ、基本性能がすごいよ』

少佐『こちらの攻撃は易々と貫通し、敵の攻撃は絶対防御…』

決まりましたn…!?

も、目標に高エネルギー反応！先程の高出力攻撃と思われまます！』

少佐がいい感じにフラグをたてると、敵は2度目の宝具使用に踏み切る。

レーベ「少佐、予備のビームマグナムを転送してくれ」

少佐『は、はい！』

レーベはポケットに拳銃をしまい、少佐から送られてきたビームマグナムを構える。

レーベ「シロ、準備は良い？」

シロ『いつでも！』

レーベはそれを聞くと…

レーベ「超兵器機関 出力制限 解除…」

すると、レーベから紫色のオーラのようなものが出現する。

同時に…

「約束された勝利の剣」

敵の宝具が放たれる。

しかし…

レーベ「万甲を貫通する機光の槍」

レーベはビームマグナムの引き金を引く。

その攻撃はレーベが放った光の奔流とぶつかり、僅かに拮抗する。

約束された勝利の剣、それは人類最強と名高い剣である。

本来ならば光学兵器とはいえ、現代兵器が勝てるはずが無かった。

しかし、超兵器ともなれば話は別だろう。

超兵器が作り上げた神話は今も尚、たとえそれが別世界であったとしても…

ピシッ…

衰えることは無かった。

ドォーン!!

敵が放った攻撃はレーベの攻撃にかき消され、そのまま敵を焼き払った。

その時の爆風は凄まじく、周りはさながらクレーターのようになっていた。

同時に紫色のオーラが消え、全ての兵器がレーベが作り上げた当時の姿に戻る。

ちなみに爆風は少佐が防いだのでイリヤ達に影響は無い。

マックス『ん？ 同志、なんか飛んできたぜ？』

マックスの示した方向を見ると、爆風に飛ばされてきたであろうカードが降ってきた。

レーベはそれを捕まえ、まじまじと眺める。

レーベ「これがあるって事は、状況終了で良いのかな？」

シロ『うん！ お疲れ様、パパ』

マックス『完全勝利UC』

少佐『いや違いますよ!?!』

レーベの脳内でそんな会話が繰り返されていると…

イリヤ「お兄ちゃん！ ここ崩れるから戻ろうよ！」

レーベ「はいよ」

こうして、レーベの初出撃は幕を閉じる。